

CAMINOS-10 (*michi* : 道)

(*Ensayos sobre la cultura de la peregrinación*)

Aiko Arai*

Bernardo Villasan*^{*}

ÍNDICE GENERAL

1. 「南米大陸、最果てのパタゴニアへの巡礼の道」(その四)

CAMINO DE PEREGRINACIÓN A SUDAMÉRICA Y PATAGONIA.

Por Aiko Arai (新井 藍子).

2. DOS CAMINOS: BUDISMO Y CRISTIANISMO (III)

(Ensayo desde una hermenéutica cristiana)

Por Bernardo Villasan.

* *Aiko Arai*. Ex profesora de la Universidad de Fukuoka (Japón).

** *Bernardo Villasan*. Catedrático Emérito (名誉教授) de la Facultad de Humanidades. Universidad de Fukuoka (Japón).

1.「南米大陸、最果てのパタゴニアへの巡礼の道」(その四)

CAMINO DE PEREGRINACIÓN A SUDAMÉRICA Y PATAGONIA.

Por Aiko Arai (新井 藍子).

(17) 第 17 日目 バルパライソおよびサンティアゴを訪ね歩く、チリ

2 月 15 日 (土)

1) サンアントニオ港からバルパライソへ

サンアントニオ港には、およそ朝 8 時ごろに着いた。手続きをすっかり済ませて下船したのは、9 時半ぐらいであったろうか。もう、船には戻ってこれない。部屋に忘れものをしないように何度も添乗員から注意されていた。港湾内の建物には、Arauco San Antonio- アラウコ サンアントニオという文字が掲げられていた。ああ、ここチリ中央峡谷に広がるサンアントニオは、アラウカノ族の土地だったのだとあらためて思いしらされた。現在、コンセプションから、少し南にあるテムコという町を中心に生活するマプーチェ族は彼ら独自の生活文化を営んでいる。チリ人は彼らを尊重してアラウコのサンアントニオと呼んでいるのであろう。

バスに乗り込んだのは、10 時を少し過ぎていた。今日も空は高く、雲ひとつなく真っ青に澄みわたっていた。この青はスペインのマドリッドの空の色と同じだ。これからのバルパライソへのおよそ 90 キロ北へのドライブは、さぞ楽しいであろう。先記したスペイン人の征服者のひとり、ディエゴ・デ・アルマグロー一行が命名したという<バルパライソ=天国の谷>への車窓に広がる光景に惹きよせられていた。両側の車窓に広がっていたのは、ワイン用の葡萄を栽培する畑であった。ここは、低い樹木に被われた小高い丘や砂丘に囲まれた

乾燥峡谷地帯である。広い葡萄園 (Viña- ビーニャ) の中に、時々ぼつと大きなワイナリー農家が見えた。道路に向けてワイナリー会社の看板も立っている。彼らの輸出先のトップが日本である。チリワインは、それほど、日本では人気が高いらしい。とくに、ここのように、海岸に近い峡谷で育つ葡萄から造られるワインは、とてもまろやかでおいしいらしい。それだけではない。海やマイポ川、Río Maipo- で採れる新鮮な魚介類の料理も、近年評判が高く、高名な詩人たちの会合場所となっている。海の見える美味しいレストランおよび詩、ポエジーというロマンティックな響きがここ、サンアントニオへ人を引き寄せるようである。

小高い丘に数十軒の家々が見え始めた。すぐに、バルパライソの町に入ってしまった。サンティアゴを建設したバルディビアは、この町をサンティアゴの〈海の玄関〉と決め、以来、現在にいたるまで貿易と漁業の両方で重要な役割を果たしている。サンティアゴからはおよそ 120 キロある。今日、サンアントニオ港で下船した理由は、サンティアゴへかなり近いからである。クルーズ船の乗船客の大多数はバルパライソへ寄らずにサンティアゴへ行き、そこを観光する。また、その中の少なからずの人たちは、サンティアゴの空港まで直接行って、それぞれの国へ空を飛んで帰国する。船で知り合った仲の良いイタリア人夫婦、アルゼンチン人の賑やかな家族、カナダからひとりで来た知的な女性、北アメリカから来たいつも笑みをたたえた夫婦たちとの会話から得た情報である。

車窓からふたたび外を見ると、歩道や建物の前の狭い空間に青空マーケットが催されていた。今日は、土曜日のせい、人で賑わっていた。肌の浅黒い人や黒人たちが衣服、履物、スイカやメロン、リンゴ、柑橘類などの果物の前に椅子を並べて腰かけていた。ガイドによると、先住民とヨーロッパ人のメスティソだけでなく、最近、ハイチから黒人たちがアボカド畑に働きに来るそうである。青空マーケットの近くには、立派な大きな建物の 1 階がアウトレッ

トと書かれていた。この界限は秋葉原のような所なのだろうか。あらゆる年代の人たちが気さくにぶらぶら歩いている。車道は片側3車線の道幅が広く、緑の街路樹が植えられ、教会、銀行、図書館などの堂々とした美しい建物が並んで、500年以上前に入ってきたヨーロッパ的な雰囲気が漂っていた。時々、古い建物の下の部分に何かに抗議する落書きのペイントが塗られているのが見られた。南米の町のあちこちでお馴染みの落書きである。文字の横にアートっぽい絵が描かれている場合が多い。

2) 歴史あるバルパライソの港町を丘から眺める

バルパライソ港に面した町の中心のソトマヨール広場でバスを降りた。この港はチリ最大の軍港でもあり、正面には立派な水色の建物が優美な姿で建っていた。もし、建物の上部に<ARMADA DE CHILE- チリ海軍総司令部>という文字がなかったら、カテドラルと見間違えてしまうほどであった。その前には、ハイチからの出稼ぎ労働者であろうか、赤い野球帽を被った肌の黒い男たちがたむろしているのが目立った。今、港へ下船したばかりのような空気をまとっていた。また、中南米ではよく見られるコロンブス像があった。片膝をついたコロンブスが右手の平を上に向けて天を仰いでいる石膏でできた像である。<クリストバル コロン、発見から500年>と彫られた文字の下には、ブロンズの銘板につぎのような文字が彫られていた。<チリ建国へ貢献してくれた移民たちへ バルパライソ開港450周年を祝して 1986年12月>

1986年に開港450周年を祝った。つまり、1536年は、先記したスペイン人ディエゴ・デ・アルマグロ遠征隊がバルパライソに到着した年である。ペルーから乾燥した土地や峻険なアンデス山脈を越えてここへ着いて、目にしたのは樹木の多い海に面した美しい場所であった。遠征隊は<天国のような町—バル

パライス>と命名した。コロンブスが1492年にカリブ海に浮かんでいる島に到達してから、スペイン人が南へ遠征を続け、チリのバルパライソまで来るのに44年かかったことになる。それから、歴史ある重要な港湾都市にまで発展したのである。一方、先住民にとっては、苦難の年月であったろう。港を取り囲むようにして点在している45もの丘のひとつ、アレグレの丘へアセンソール（ケーブルカー）で上った。中心地や港の周りは平地だが、町のほとんどは急な坂道や石段のつづく丘陵地帯である。急な坂を上るためにアセンソールが架けられており、現在稼働しているのは、6つだけである。急斜面をがたがたいわせて、素朴な木箱のようなアセンソールが<アレグレの丘—歓喜の丘>へあっという間に運んでくれた。展望台からは、港や周辺の丘にびっしり建つ家々が眺められた。南米では、丘の上に行けば行くほど貧しい人々が住んでいると、Jica での通訳時代に、南米からきた研修員から聞いたことがある。インフラ整備が整わなくて不便だから、貧困層がそういう場所におしやられるのである。不法占拠をしている家族も多数いるという。そう思ってよく見たが、下の方にも板塀や崩れかけた土塀、土塁のすぐ脇や上に建てられた家々がある。しかし、比較的大きく、カラフルに塗装されている。まばらに植えられている緑の樹木に、夏の陽光が射してのどかな光景を醸しだしていた。遠方に目をやれば、南太平洋岸の薄青い丘の上には、いくつかの高層ビルとビルの間にある低い建物が、ぼうっと青く霞んで見えた。雲ひとつない青い空の下に横たわっている海に面したその丘は、<夏の青の夢の丘>と呼んでもおかしくなかった。

展望台を下りて歩き出したアレグレの丘は、洗練された広い邸宅が立ち並ぶ境界で、スペイン植民地時代には、貴族の屋敷があったのではないかと推測された。しゃれたカフェやカトリックの教会、独特なデザインで目を惹くイタリア建築による宮殿などを観賞しながら小路をぶらぶら歩いていくと、コンセプ

シオンの丘に着く。バックパックを背負った若ものたちが何人も歩いている。この丘は、バルパライソ港町の歴史地区として世界遺産に登録されているので、世界中から観光客が訪れるのである。迷路のような路を歩いて目立つのは、壁画アートである。そのうちのひとつに先記した先住民、別名オナ族のセルクナム<(14) の3>を参照のこと>の火の大地精霊信仰にもとづいたものであろうと思われる火の精霊が、裸体で描かれている。目を除いた頭部は頭巾で被われているセルクナムが描かれていた。背景の建物の壁と頭巾、セルクナムの裸体上のペイントが、赤と白の組み合わせで統一されている。素晴らしいアートである。セルクナムへの哀悼の情があふれているような気がした。

この地域には、20 ちかい異なった先住民族が居住していたと言われる。スペインから独立した後の 1900 年代にチリ政府により、3 万から 4 万人のセルクナムが虐殺されたという。このようにして、ほとんどの先住民は絶滅したが、農耕や漁業に従事しているマプーチェ族が、チリ全国にわたって彼らの伝統を守ったり、周囲にあわせたりして細々と生きている。

3) リゾート地ビーニャ・デル・マルから首都サンティアゴへ

バルパライソからわずか 9 キロのリゾート都市、ビーニャ・デル・マル (Viña del Mar) に着いたのは、午後 2 時前だった。南太平洋に面した美しい洗練されたリゾート地で、遊歩道も車道も広々としている。背の高いヤシの並木が芝生に涼し気な陰を落としている。サンティアゴなどの都会の裕福な人たちがここで、休暇を過ごすのにふさわしい瀟洒な高層ホテルや高級そうなレストランが浜辺に沿って並んでいる。サンティアゴからは車でおよそ 2 時間なので、週末の日帰り旅行でも十分ここで楽しめる。ビーチにちょっと立ち寄ったという風情の若い男女たちが短パン、T シャツ、バックパック姿で浜辺や遊歩道を

勢いよく歩いている。遠方に広がっている浜辺では、日光浴をしている人たちが小さく見えた。この海水温度は、すぐ傍の沖を流れているフンボルト寒流によって低く、12月から3月の夏でも海に入るより、さんさんとふりそそぐ陽光を浴びにくるのである。カジノがある青々とした広場とビーチ (Playa Acapulco) の中間に、海に面したアヴェニューがあり、レストランが立ち並んでいる。そこでスペイン時間の遅めの新鮮な魚介類の昼食をいただき、午後3時半にサンティアゴへ向かった。土曜日なのにハイウェイは両車線とも空いていた。およそ南へ下る120キロの道のりの車窓には、葡萄園が広がっていた。ここも海が近くにあり、低い灌木の生えた峡谷地帯である。先記したように、このような環境で育つ葡萄からは、ほのかな芳香を放つ繊細な味覚のワインが醸造されるのである。滞在中には、ぜひ試してみたいと思っている。醸造所-Bodegas—ボデガの看板があちこちにこちら向きに立てられていた。葡萄園の谷のはるか向こうには、青いゆるかなアンデス山脈の稜線がくっきりと清澄な空の下に伸びていた。先記のスペイン人のバルディビアは、ペルーを出発して、ほとんど1年かかって、ボリビア、アルゼンチンを経て、このアンデス山脈を越えて、サンティアゴへたどり着いたのであった。さぞ、難儀な行軍であっただろう。

すでに見てきたように、チリは、ラテンアメリカ諸国の中で、都市中産階級の割合が高く、社会保障制度も最も進んでいて、政治的、社会的に安定している国である。しかし、ガイドの藤尾氏によると、昨年(2019年)の10月以来、大規模な反政府運動が起こっているようである。きっかけは、あるカトリック教会の神父による性的虐待だったそうだが、長年にわたる貧富の差の拡大、年金制度、若ものの失業率の高さへの市民の不満が一気に広がった。始めは、千人程度の左翼政党の運動であったが、昨年のある日曜日には、アルマス広場に120万の市民が集まって、抗議デモが行われた。サンティアゴは今や700万の

人口を擁し、近辺を合わせると 1800 万人にものぼる。首都には、10 万から 15 万のマプーチェ族が住み、チリの北から南には、先住民の子孫たちが 170 万人はいるという。彼らは社会的には、下層階級に属して、貧しい生活を強いられている。サンティアゴにおよそ 40 年ちかく居住している藤尾氏によると、チリに住みだしてからここ 40 年間、チリはどんどん、経済的、社会的に悪くなってきている。しかし、他のラテンアメリカよりは、まだ良かったので、ハイチ、ペルー、ベネズエラなどから出稼ぎ労働者が集まってきていたが、サンティアゴで抗議デモが始まってからは、失業者が以前より増えて、出稼ぎに来ていた外国人が仕事にあぶれて自国へ戻りはじめているらしい。しかも夜になると、どこからともなく、コロンビア、ペルーのグループが集まってきてコカインの売買をするなど、治安の面でもサンティアゴは悪くなってきている。藤尾氏は今、真剣にもっと平和で安全な南へ移ることを考えている。日本にいては、聞こえてこないサンティアゴの近況が分かってきて興味ぶかった。そうこうしているうちに、首都にバスが入っていった。＜Al Pueblo Mapuche- マプーチェの国へ ようこそ＞という看板に迎えられた。マプーチェ族は、まだ彼らの健在ぶりをアピールしている。

4) サンティアゴを散策する

(1) サン・クリストバルの丘

サン・クリストバルの丘からは、サンティアゴの町が一望できた。周囲をアンデスの山々の碧い稜線に囲まれた盆地である。とび抜けて高い山は 5000 メートルある。高層ビルの一角には、南米でいちばん高いという 300 メートルのスカイコスタネラの青いクリスタルのビルが抜きんでて建っていた。アンデス山脈の頂上にまで届きそうである。東の新市街の富裕層の住宅街には、緑の美しい街路樹がたくさん植えられている。マンションが林立しているが、その

中には高層マンションも見られた。ここにも緑の樹木が目立つ。サンティアゴの市民たちの住まいへの環境の配慮がくみとれた。盆地に発展した町は、風が吹き抜けないとスモッグに被われやすいということを配慮した街づくりなのだろう。西には、低所得層や貧困層の住宅地がある。また、公共地を不法占拠したバラックが密集しているスラム街もあり、かなりはっきりした住み分けが見られるのがサンティアゴである。

丘の上には、夕方の爽やかな風がとおり抜け、背景のアンデスの山々がくっきりと眺められる。その峻嶮な山脈を越えて、広々とした平地を見つけたときのバルディビア一行はどんな感慨を抱いたのであろうか。山々のあちこちに隠れていた原住民と闘いながら、1年かかった長〜い遠征の末にたどり着いた場所に要塞を築いたのは、ここではない。ここは市街地との標高差が300メートルちかくある。白亜のマリア様像が立っている頂上は、880メートルある。旧市街からは、ケーブル鉄道で、また、新市街からは、ロープウェイでこの丘まで来れる。

(2) アルマス広場

サン・クリストバルの丘を下りて旧市街に戻ったのは、夕方の6時半であった。まだ、夏の陽光は強烈に街路にふりそそいでいた。スペインのように、光と影—*Sol y Sombra*—がくっきりと分かれていた。1738年創立の国立チリ大学の法学部の前をとおり過ぎた。教育の水準もラテンアメリカの中では、最も高い国のひとつである。女性の大学への進学率が高いので、職場への進出も高く、社会的地位も高い。ここから、少し東へいったところに、サンタ・ルシアの丘がある。丘といってもほんの70メートルの高さしかない。マボチョ川が流れているのが見える。バルディビアが、襲撃をしかけてくる先住民に備えた要塞を築いた場所である。火攻めなどの激しい戦闘が繰り広げられた跡には、

バルディビア像がある。スペインの彼の出身地の名前をつけて、ここに〈Santiago de Nueva Extremadura-新エストレマドゥーラのサンティアゴ〉が、建設されたと、ある。

椰子の木が涼し気な影を落としているアルマス広場の中央には、南米の父と慕われているリベルタドール、シモン・ボリバルを記念した噴水がある。そこには、チリのコンキスタドール、バルディビア像もあった。スペイン人、Enrique Pérez Comendador エンリケ ペレス コメンダドール作によるブロンズ騎馬像で、右手に公正なシンボルとして、サンティアゴ建設証明書を持ち、左手は剣を支えている。手綱のない逞しい馬は、チリを意味する。バルディビアはサンティアゴ市の基礎を築いた。しかし、これからのチリは、自由に未来の道を歩いて行くであろうという作者の願いが、暗喩的に表現されている。台座の銘板には、〈チリ国の建設者 偉大な指揮官 ドン ペドロ デバルディビア；チリへスペイン共同体による贈呈 独立 150 周年を祝して 使徒サンティアゴ祝日 1963 年 7 月 25 日〉と、刻まれていた。

スペインからの独立 150 周年を祝って、バルディビア像が贈呈されたことが分かる。独立後は、チリ国民の 1 人ひとりが、未来のチリを築いてほしい、しかし、建設者のバルディビアを忘れないで欲しい、というのがアーティストの本音であろう。ちなみに、使徒サンティアゴ（聖ヤコブ）は、スペイン、チリの守護聖人であり、軍神の性格も備えている。

町の中心であるこの広場には、1558 年にスペイン人によりサンティアゴ大聖堂が建てられた。マプーチェ族の指導者、ラウタロが討伐された翌年であり、バルディビアの死後 5 年目であった。バルディビア一行が、1541 年にこの地に入ってきたときから計画されていた建立が、何度となく先住民の激しい襲撃を受けて果たされず、いちおう、マプーチェ族を制したと考えられたとき

に、やっと切望が叶ったのである。今では、90%ちかいカトリック信者がいるチリ・カトリックの総本山である。聖フランシスコ・ザビエルの木像が飾られている大聖堂は、イエズス会の思想が色濃く反映されている。人々の精神的な支えになっているここは、かつてのピノチェト軍部独裁体制下では、穏健派による反独裁の市民グループの大きなよりどころとなっていた。大聖堂の前では、宗教的集まりという口実で、しばしば、軍部独裁に抗議する集会が開かれていたという。

(3) モネダ宮殿

アルマス広場から、碁盤目のように整然と整えられた街路を南へ数ブロック行くと、憲法広場に着く。かつての悲劇の場所となった白く塗られた美しいモネダ宮殿がある。1973年、この宮殿、すなわち大統領府が、ピノチェトを中心とする軍部のクーデタによる空爆を受けて炎上した。1970年、南米で初めて選挙によってサルバドル・アジェンデ (Salvador Allende Gossens, 1908～73年) が社会主義政権を樹立した。降伏を受け入れずに自殺したアジェンデの最後の砦となった。アジェンデ政権は、ラテンアメリカにおける民主的手続きによる最初の社会主義政権として多くの業績を残した。チリ独自の社会主義の道を標榜し、農地改革法による地主制の解体、主要産業・企業などの諸政策を実施したが、その中で、北アメリカ系資本下の銅産業の無償国有化は、ニクソン政権による報復を引き起こした。アジェンデ政権が3年弱という短命に終わったのは、ニクソン政権をはじめとする外国の干渉があったからである。アメリカのホルビー CIA 長官は、1970～73年に800万ドル以上の資金を用いて、チリ国内で、反対勢力への資金援助などの不安定化工作を進めた事実を認めている。

ピノチェト政権は、経済的・社会的改革をほぼ白紙に戻し、徹底した自由主

義経済の再建を進めた。国有化された銅産業の補償を行い、北アメリカとの関係を修復し、農場の返還、民営化を断行した。

軍事政権下の＜人権問題＞は、世界的な批判を受けた。クーデタ直後から戒厳令が敷かれ、77年まで続いた。クーデタ後1年間におよそ2万人が虐殺された。不当逮捕、不当拘留、拷問、行方不明など人権侵害が横行した。スペイン留学中に見た数十年前の映画、＜サンティアゴに雨が降る＞に、クーデタの様子、その後のチリ、とくにサンティアゴにおける逮捕、拷問、行方不明などおぞましい当時のピノチェト独裁政権の左派に対する徹底的な弾圧が詳しく描かれている。記憶に間違いがなければ、題名の＜Llueve en Santiago-サンティアゴに雨が降る＞は、アジェンデ政権下のチリ全国にいる社会主義者たちへの、ラジオでよびかける合言葉で、クーデタの勃発を知らせ、および、それに対する反撃を促した。アジェンデの姪で文学者のイサベル・アジェンデ (Isabel Allende) のいくつかの文学作品の底には、当時の左派勢力に対する悲惨な弾圧の実態が流れている。

ピノチェト政権下、1980年9月、新憲法がおよそ67%の賛成を得て採択された。大統領の権限は大幅に強化された。付属規定では、1989年9月、国会議員（2院制）選挙が実施されることになった。

現在のチリは立憲共和国で、議会は上院、下院の2院制である。今回、サンティアゴからメキシコシティに飛ぶ航空機の中で読んだチリの Mundo 紙 (2020年2月16日)によると、＜憲法がチリを2つのグループに分断している、ピノチェトの法律の擁護者と改革推進派と＞ サンティアゴで大きな2つのデモによる結集があった。何人かは、ピノチェトの写真を腕にかかげて、アウグスト・ピノチェトの独裁体制下（1973～1990年）に発布された憲法の維持を叫び、何人かは、ナチのカギ十字にバッテンをつけた旗を両手に高く掲げて新憲法を叫んでいた。これは、先に述べた去年（2019年）の10月に引き起こさ

れた市民のいくつかの政府に対する要求のひとつである。このデモ隊による騒ぎは、チリが直面している社会的危機がいまだに続行していることを如実に示している。2つの大きなグループの暴力的な対決を避けるために、警察は催涙ガスと放水車による強力な水を使った。およそ千人の人々が集まっていた。ここ3週間、(旧市街の東にある)新市街の特別なラス・コンデス地区(今、ここがサンティアゴでもっとも高級でおしゃれなエリア。一流レストランが並び、上流階級の人々が集まってくる一筆者)の大多数の人は車の通行を妨げることもなく穏やかに、(新憲法)反対のプラカードおよびチリ国旗をかかげながらチリ左翼反対のスローガンを叫んでいた。ピノチェト死後数十年が経っているのに、彼の写真をかかげている者たちは、いまだにピノチェトの政治的理念を支持していると、ムンド紙の記者につぎのように語っている<今まで40年間にわたって機能してきた憲法をどうして変えなくてはならないのか?もし、可能なら、いくつかの法律を改革するだけで十分なのではないだろうか>ソーシャル ネットで招集され、ここに集まってきた人たちは新憲法を要求し、反対グループと激しくやり合った。これにより、通行妨害まで引き起こされた。やがて、警察の車が到着して、催涙ガスが放たれ、放水車の水が勢いよくまかれた。残っていた新憲法反対のグループが、取材していた報道チームに対して怒りをこめた侮蔑的な言葉を投げつけ、警備隊を擁護した。昨年10月18日以来、チリで勃発した抗議デモの中でも、新憲法がもっとも重要な要求のひとつとなっている。ここ4か月の間の騒乱で31名が死亡した。この30年間で、このような政治的、社会的な分極化が起こったのは、はじめてであった。今月26日に、国民投票のためのキャンペーンが始まる。以上がムンド紙の記事の要約である。

チリ国民にとっては、大変重要な政治的、社会的な局面を迎えている現在だが、日本には、報道されていない、それとも私が見落としたのか、.....

落日の金色の球体が黒々とした木立の向こうに、しばらくの間、ぐずぐずしながらとどまっている夜の8時もだいぶ過ぎた道路を国際空港へバスが走っていく。まだ、空も木立の向こうの山々もライトグレーで、球体のまわりに広がっている薄オレンジと美しく調和がとれていた。大都市、サンティアゴに泊まることもなく、メキシコシティへ飛び発つのである。

(18) 第18日目 メキシコシティ、メキシコ

2月16(日)

昨夜、遅く出発した航空機がメキシコシティのベニート・フアレス国際空港に着いたのは、翌日の早朝の5時頃であった。ガイドの川原さんが待っていてくれて、再会を喜びあった。こんな早朝なのに、川原さんは、眠たげな様子も見せずにてきぱきとバスに誘導してくれた。外はまだ暗かった。旅の出発地であったこのメキシコシティに1月30日に着いてから、もう、あっという間に2週間以上が過ぎていたのである。旅の後半は、人生の後半と同じように、時間が加速されて過ぎていくのをたびたび、ため息とともに実感してきたが、今回もそんな、もう戻ってはこない、その時々には、濃密に過ごしてきた時間が惜しまれてひたひたとした哀切の思いに胸がいっぱいになった。

そんな人々のいち夜を機内で過ごした少し疲労感をともなった哀惜と、これからの観光の期待への高揚感でいっぱいになったバスが、グアダルーペ大聖堂へ向かって出発した。メキシコシティのあらゆる町に建てられているグアダルーペ教会の総本山である大聖堂には、メキシコ国民から敬愛され、精神的な支柱の聖母が祀られている。そればかりではなく、グアダルーペの暗褐色の聖母は、メキシコの混血社会およびラテンアメリカの混血女性の象徴であり、後には、メキシコの国民的シンボルになる。今まさに、ラテンアメリカ諸国にとどまらず、世界中のカトリック信者が巡礼で訪れ、ミサに与るあの令名高いグアダルーペ大聖堂へ向かって、まだ夜が明けきらない薄闇に包まれてバスが、

ほとんど対向車のない道路を走っている。

1) グアダルーベ大聖堂 (Basilica de Guadalupe) および聖母

およそ1時間弱で大聖堂に到着した。こんなに朝早い時間にメスティソのメキシコ人らしい一団がいた。その中の何人かは杖をついている。巡礼で遠くから歩いて何日もかかってここへ、今着いたようである。スペインの巡礼の道を何日も、何週間も歩きながら、ガリシアのサンティアゴ大聖堂に着いてミサに与るのと同じである。そういえば、今日は日曜日なので、朝の礼拝は7時には始まる。辺り一帯に黎明の金色の光が広がり始めた。まもなく黄色い輪に被われた白い球体が地平線に現れた。そして、明るいブルーの透明の空がさきほどまでの闇を追い払って頭上に広がり、すっかり夜が明けた。

現大聖堂の広い敷地内のテペジャク (Tepeyac- メキシコシティの北西、現 Guadalupe Hidalgo 市) の丘と呼ばれているところには、1709年に再建された旧大聖堂がそのまま遺されていた。ああ、この場所に聖母が顕現なされたのかと思うと感慨深かった。伝承によると、改宗して間もないインディオのフアン・ディエゴ (Juan Diego) の前に1531年12月、黒髪、暗褐色の聖母が現れ、ここに、聖堂を建ててほしいと司教 (Juan de Zumárraga, フアン・デ・スマラガ、メキシコ市の初代スペイン人司教。フランシスコ会。征服直後のメキシコ社会で重要な役割を演じた。先住民の教化、および保護につとめ、人文主義的理念に立った教育を彼らの子孫に施そうと尽力した) に伝えるように命じた。この季節にはないバラの花とフアンのポンチョに写した自分の図像を司教に見せるように、証拠として与えた。聖母が写された画像を見るために、世界中からグアダルーベ大聖堂へ人が押し寄せるのである。

まもなく、目前の出現の場に聖堂が建てられて、たちまち多くの先住民の信

仰の対象となった。後には、クリオージョ層（中南米生まれのスペイン人）にも浸透していった。

話しは変わるが、（メキシコ征服者の）エルナン・コルテスは1519年、現在のベラクルスにメキシコ遠征隊の拠点を建設するために、キューバ総督ディエゴ・デ・ベラスケスにより派遣された。メキシコ内陸部に先住民の集団がいるとの情報を得たためである。この遠征隊は、500人の武装兵からなりたっていた。マヤ語とナワトル語（アステカの言葉）に堪能な先住民の女性通訳のマリンチェ（メキシコでは裏切り者の烙印が押されている）およびスペイン人でマヤ語に熟達していたヘロニモ・デ・アギラールも同行していた。コルテス部隊は16頭の馬も連れた精悍な編成であった。また、遠征隊には、これまでスペイン人が配下にした先住民の協力者も含まれていた。2年後の1521年に、コルテスは、アステカ王国の都テノチティトランを制圧した。この年8月にアステカ王国が滅亡した。

コルテスの征服後、10年たった1531年、テペジャクの丘にマリア様が出現した。その丘には、アステカの母神トナンツインの神殿があった。コルテスが、それを異教の巢窟として破壊した。出現の場所と時期から推測して、その母神がマリア様と同一視されたと考えられている。また、アステカの軍神ウィツィロポチトリは聖ヤコブ（スペイン語では、サンティアゴ、キリストの12使徒のひとり）の故事にちなんで同一視された。

こうして、土着の地母神信仰とキリスト教のマリア信仰が習合した。メキシコだけではなく、スペイン征服後の中南米諸国では、被征服者の先住民に対する強制的なキリスト教化と村や町における集団改宗や集団洗礼から、このような習合現象が起こったのは、ごく自然なことであった。先住民は武力による征服には、敗退したが、精神的には、全面的に屈服しなかったという証であろう。

実際に礼拝が行われたり、ポンチョの聖母画像が見られるのは、新大聖堂である。1976年に建設された円形のきらびやかな装飾が施されたモダンなデザインの建築である。メキシコ人好みなのだろうか。少し違和感をおぼえた。それとは対照的なのが、古びてはいるが、厳かな旧大聖堂であろう。真ん前にある新大聖堂の色鮮やかなグリーンと金色の正面入口には<PUERTA MARIANA- マリア様の入口>と書かれていた。すぐ上の2階のバルコニーの壁には<¿NO ESTOY YO AQUÍ QUE SOY TU MADRE? -あなたの母である私がここにいるではありませんか?>と、大きな金色の文字で、大聖堂に入っていくみんなに呼びかけている。礼拝をすでに終えたのか、ジーンズにジャケットの若い男女が数人まわりを歩いていた。先ほどのマリア様の呼びかけに応じて中に入っていく。内部もモダンなデザインで基調は茶色で落ち着いた雰囲気醸成がなされていた。巡礼者や一般の観光客がいちばん見たい聖母の画像は、その前でゆっくりと眺められないようにできていた。エスカレーターがゆっくりと昇って行くほんの数分間しか観賞できなかった。昇りきったところで、少し立ち止まって写真を撮っていると、警備員に促されてしまった。今まで、いくつかのメキシコのグアダルupe教会で時間をかけて観賞してきたお馴染みの画像は、金色の額縁に収められていた。どんな感銘も心の中に湧きでる時間がなかった。後に詳述する1810年のメキシコ独立戦争で、グアダルupeの聖母に再び会うことにして、ひとまず、お別れしよう！

2) 大聖堂からテオティワカンへの道

グアダルupeから北へ向かってバスが走っている。メキシコ草原地帯の古代都市の聖地であったテオティワカンの太陽のピラミッドは、およそ50キロの場所にある。左右の車窓に見えるのは、小高い丘の下から上までびっしりと建てられている色とりどりの家屋である。ピンク、水色、緑、レンガいろ、白、

黄いろなど掘っ立て小屋風ではなく、しっかりした住居に見えるが、ほとんどが不法に占拠した土地に建てられていることが、ガイドの川原さんの説明で分かった。それにもかかわらず、近頃では、電気、飲み水などの設備が整えられているという。道路の近くにあるので、公共事業が可能であったのであろう。下層階級に属していようと、生活に欠かせない電気、水が普及しているだけでもよし、としなければならないと、居住者は考えているにちがいない。というのは、メキシコの日刊紙<エル ソル デ メヒコ、El Sol de México, 2020、2、16>によると、「メキシコのおよそ700万人が電気、飲み水などのインフラ設備に恵まれていない。これは、国の6.2%にあたる。道路から最低3キロ以上離れた孤立状態におかれている500から2500人以下の人口を擁する小さな農村の町や村では、日常生活に不便を強いられている。メキシコ総人口から見ると、一見、少ないように見えるが、実際には、中米のニカラグア、パナマやパラグアイの人口に迫る人数である。」

「孤立状態の集落は、それぞれが離ればなれに散らばっているので、そうしたやすくインフラ整備を行うことができない。このような公共事業の設備には、革新的なテクノロジーが必要なのである。メキシコの農村地帯の41%がこのような孤立状態にあるもう一つの要因は、農産物流通システムの欠如である。」

「1990年および2000年に、500人以下の集落が14万から17万3千に増加した。しかし、一方では、集落人口は12.2%から9.4%まで減少した。農村地方の地理的に離れた孤立した集落では、<高い>、<非常に高い>という疎外指数が38%示されているが、都市に近い町では、わずか8%しか示されなかった。メキシコシティのような大都市では、孤立した町は見られなかった。」

バスの窓から眺められる密集した家々が、何故、道路に近い丘に不法占拠せざるをえなくなった理由が上記の記事で分かったような気がした。もっと悲惨な状況に置かれているのが、離村の集落なのである。

疎外された村々をより深く理解するために、ざっと、ここにメキシコの地理的環境について述べてみたい。日本の国土のおよそ5倍もある広大なメキシコ国土は、北部、中央部と南部の3つの地域に分けられる。北部は2つの山岳地帯となだらかな平地部分からなる。北回帰線の北に位置し、砂漠地帯が広がる乾燥した熱帯性気候の風土は、アメリカ映画でたびたびお馴染みのメキシコであり、アステカ王国もこの地域に栄えた。メキシコの首都メキシコシティもこの地域にある。熱帯性気候だが高地のために朝夕は気温がぐっと下がる。メキシコの農地の大部分は、この地域の平地にある。可耕地面積はメキシコ国土のわずか15%しかない。サトウキビ、コーヒー、綿などの栽培が行われている。上記にしるした過疎地域では、細々とこれらが栽培されているのである。南部は熱帯性密林地帯であって、ユカタン半島を含むマヤ文明圏はこの地帯にあった。サバンナ、ステップ（温帯草原地帯）もこの南部にある。

3) テオティワカン王国の太陽のピラミッドと月のピラミッド

壮大な太陽のピラミッドの前に立った時には、強烈な太陽が真上からふりそそいでいた。ここは、メキシコ中央部の草原地域なので、気温は高くない。陽射しを避けるために冬用のジャケットを着て、フードを被るが、汗もでないし、暑さも感じない。日陰に入れば、涼しく、からっとした気持ちのいい乾燥した草原地域らしい気候である。この地域には、紀元前後から7世紀まで栄えた古代都市があった。政治的にも宗教的にも突出したテオティワカン（TEOTIHUACÁN）文明という一大文明圏を形成した。太陽のピラミッドと月のピラミッドの遺跡により、ここに栄えた古代文明を偲ぶことができる。テオティワカンの滅亡後、この高原地域にトルテカ人、チチメカ人が勢力を得た。15世紀になると、チチメカ人の一派でアステカ人と呼ばれる民族が台頭してきた。周辺の民族を征服して支配下におき、最大勢力は50万人とも言わ

れる大都市国家アステカ帝国を築くまでになった。このようにして、古代のメキシコには、マヤ文明（拙著、中米およびカリブ海諸島への巡礼の道、その一を参照して下さい。ユカタン半島を含むメキシコ湾と太平洋を結ぶ細い地帯にマヤ文明圏があった）やアステカ文明（メキシコ高原地域）が栄えた。両文明地帯はメソアメリカ文明圏に大きな影響力を与えた。その後、スペイン植民地時代が始まると、メキシコ古代文明の神殿が次々と破壊されてしまう。神殿で執り行われる祭礼が、悪魔の儀式であると判断され、先住民は未開人で、彼らの文明は非ヨーロッパ的で野蛮であると、見なされたからである。このようにして、それ以来、新大陸において、ヨーロッパ人は、征服、植民地化を拡大するために、彼らにとって都合のいいイメージを作り上げていった。

炎天下、高さ、およそ 63 メートルある太陽のピラミッドの階段を上った。基底部の一辺は、およそ 216 メートルある。ピラミッド神殿の規模としては、2 番目の大きさだという。真南に建てられていることがはっきり分かったのは、上るにつれて、太陽が目の前に迫ってきて、その強烈な陽光に目も開けていられないほどだったからである。基底部の頂上に着いた。以前は、その上に神殿があった。太陽の光線がちょうど、神殿に射している時刻に頂上にいられたことに深い感慨をおぼえた。周辺を眺めると、樹木の茂った乾いた茶色の平野が広がっている。月のピラミッドが、東方に見えた。正確にいうならば、階段が基底部の途中までしかない。平野の向こうに、下からは全然見えなかった山々が透明な青い空の下に横たわっていたのには驚嘆した。山並みはピラミッドの上からしか眺められない。そういうふうには計算して神殿が建てられたと、言われている。メソアメリカのピラミッドは、基本的には神をまつる場、つまり、神殿であった。ピラミッド神殿建築は、前 1000 年ころから始まったと考えられている。現在のメキシコシティの北東 50 キロメートルにある、これらのテオティワカンの太陽、月のピラミッドはそれより遅く、前 200 年から建設

が始まったとされている。今、上ったばかりの両ピラミッドは最上部の神殿部が残存していない。マヤ文化のものなど一部しか残っていないので、ピラミッド神殿の建築様式は基壇部の特徴によって分類される。それによると、テオティワカン様式は、傾斜壁と垂直壁の組み合わせ壁（タルー・タブレロ式建築）である。形状は階段状である。基壇部の壁に、石彫りと壁画の装飾が施されているのをしっかり観賞し、写真に収めた。壁にピューマの画が残されているのがあった。その近くにあった案内板には、簡単な説明しかなかった。要約してみると、＜1963年の発掘調査により発見された基壇部および神殿の一部の壁画装飾である。建築様式において、一群のピューマの壁画装飾として知られている。ネコ科の動物が横向きに描かれていて、開けた口、大きな爪のある脚、斑点のない皮、および尻尾などの特徴からピューマであると判断された。ピューマの背景に描かれている斜めの線には、白、赤、緑が塗られていて、水に囲まれている環境を象徴している。また、壁画の板枠は準貴石を使った緑色の円によって装飾されている。緑色は神聖な色である＞ピューマは、神格化されていた動物なのであろう。それに対して、前1000年のマヤ文明では、ジャガーが神格化されていた。

この壁画を見ていない人には、理解できない説明であらう。もう少し丁寧にテオティワカンの古代都市と宗教を通して説明してみたい。古代都市は驚くほど緻密な計算によって建設された。太陽と月のピラミッドおよび南北に走る＜死者の大通り＞が、都市の基準であった。基本線の方角は、少し真北から東へ傾いており、全ての建物はこの基本線に従って建てられていた。最盛期には、びっしりと、建物に覆われていた。今、真南にある太陽のピラミッドの上に立った私は、北に真つすぐ視線を向けた。バスを下りてピラミッドまで歩いて来た大通りが、当時の＜死者の大通り＞であった。なんと、今は、みやげものの店が並んでいる。シャッターが下りている店も多い。当時は、どの建物も、

先記の傾斜した壁と垂直壁の組み合わせで統一されていた。そこには、壁画や石彫りの装飾がほどこされていた。ピラミッドの基底部のいくつかは、月のピラミッドを起点とした東西に走る通りに建てられているのが目をひいた。当時の都市の面影が偲ばれた。南北の大通りと東西の通りが交差している地点も上からはっきり確認できた。山に抱かれた雨の少なそうな茶色の大地が広がっているのも確認できた。初めは、雨乞いの祈禱などが神殿でたびたび行われてきたにちがいない。やがて、人々は、灌漑の技術を学び、発展させていったのである。

テオティワカン遺跡の出口ちかくに、1962-1964年に発掘されたケツァルパパロトル（Quetzalpapalotl）宮殿があった。案内板によって、ジャガーの中庭や羽毛のあるカタツムリの壁などがあることが分かった。遠くに離れていたのに、両文明で、森羅万象が崇拜されていたことが分かる。また、当時の高い建築技術を示すものは、都市全体に完備されていた下水網であろう。これで、先の説明の＜水に囲まれていた環境＞の意味が分かる。そればかりではなく、テオティワカンの代表的な神であるトラロック（Tlaloc）は、雨をつかさどっていた。さらに、この神は一神教的性格を持ち、テオティワカンの象徴であった。先記の灌漑事業の発展により、集約農業が確立された。周辺では、黒曜石や塩などが産出され、テオティワカンの勢力は拡大されていった。2世紀頃には、グアテマラにまで進出し、ほぼメソアメリカ（メキシコの北部を除いた全地域、グアテマラ、ベリーズ、エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグア、コスタリカなどの中米を指す）全地域の政治的・経済的支配権を獲得していったと推定される。

なお、テオティワカンの宗教は、先のトラロックの他には、火の神、春の神、羽毛のある蛇神ケツァルコアトルなどが存在していた。ちなみに、マヤ文明で

も、風と豊穡の神として羽毛の生えた蛇が崇拜された。テオティワカンでは、羽毛の生えた蛇は、ケツアルコアトルと呼ばれる水と農耕に関連する神であった。両文明においては、宗教は、政治や経済と明確に分離していなかった。

テオティワカン遺跡のケツアルコアトルのピラミッド壁面にその蛇神の素晴らしい彫刻が残されているようであるが、今回の旅では、観賞する機会がなかったのは、残念である。

ケツアルコアトルに関して、伝えられている話がある。15世紀に栄えたアステカ王国（後に詳細）の王モクテスマ2世（在位1502-20年）は、コルテスの一行が1519年にメキシコ湾岸の港町ベラクルスに到着したことを知ったとき、ケツアルコアトルの再来と思いこんだ。敵の奸計に敗れてメキシコ湾の彼方に去ったケツアルコアトルが、再来するという伝説が伝わっていたためである。そのため、征服軍に抵抗はしたが、最後にはコルテスに恭順してしまった。この蛇神、ケツアルコアトルがアステカ王国の滅亡の要因のひとつとなったのである。

先のテオティワカンのピラミッドのピューマの壁画に話を戻すと、＜緑色は神聖な色であった＞という説明については、マヤ人にとっても、緑と青（光の反射で青にも、緑にも見える。マヤ・ブルーとして知られている）は、神聖な色であった。＜翡翠＞は、緑色の硬い玉であり、その神聖な色、希少性、硬さゆえに貴重であった。また、グアテマラの国鳥であるケツアル鳥の羽根は、太陽の光のあたり具合によって、光沢のある緑か青に見える神聖な色であった。支配層はその羽を頭飾り、扇、衣装の装飾にして、被支配層との差を明確にした。

テオティワカン滅亡後のメキシコ高原や周辺地帯には、チチメカ人が台頭

し、13世紀になると、マヤ地域にまで大移動して、他民族や文明を破壊していった。15世紀になると、メキシコ高原はチチメカ人の一派でアステカ人と呼ばれる民族の勢力下となった。そして、最大勢力は50万人とも言われるメソアメリカ最大の都市国家アステカ帝国（後1325－1521年）を築くようになった。アステカの公用語はナワトル語である。主都テノチティトランは、ナワトル語で<メシコ・テノチティトラン>と呼ばれた。スペイン人征服者と敵対先住民の同盟軍により破壊され、その上にメキシコシティが建造された。スペイン語で<メヒコ>と発音され、後に首都名と国名になった。テノチティトランはマヤ地域から1000キロメートル以上離れている。

1521年、スペインによる征服後、メソアメリカ文化は大きく変容するが、消滅はせず、イベロ・メソアメリカ、或いは、混血文化とでも称すべき文化が形成されていく。

4) メキシコシティ歴史地区を訪れる

1) ソカロ広場（憲法広場）

テオティワカン遺跡からおおよそ50キロメートルに位置するメキシコシティに到着したのは、午後3時を過ぎていた。真上から熱帯の暑い光線がふりそそいでいるソカロ広場に一歩足を踏み入れたとたんに、一陣の風が吹き抜けたような気がしたほど、ソカロ広場は広かった。世界有数の広さを誇っている広場は、日曜のせいか大勢の人が行き交っていた。私と同じような旅行者なのだろうか。そうでなければ、いちばん暑いこの時刻に歩き回るもの好きもいないであろう。広場の向こうの端っこにいるひとたちが、はるか遠くに望まれるほどソカロ広場は広々していた。正式名、憲法広場と呼ばれているメキシコシティの中央にある広場で、メキシコシティの中核地点でもある。古くは、テノチティトランと称するアステカ帝国の主都であった。

A. 湖上の都、テノチティトラン

＜アステカ Azteca＞とは、彼らの伝説上の起源の地である＜アストラン Aztlan＞の人を意味する。のちに、＜メシトリ神を崇める人＞を意味する＜メシカ México＞と称されるようになった。先記に述べたように、現在の国名、メヒコは、ここからきている。

アステカ族はアストランを12世紀初頭に離れ、13世紀には、メキシコ盆地に入っていた。つぎの説明を分かり易くするために、ソカロ広場を歩いてテノチティトラン古都の模型が造られている場所まで移動することにする。大きなテスココ湖に囲まれたテノチティトランのイラストが、1524年、エルナン・コルテスがカルロス1世にあてた＜報告書簡 (Cartas de Relación) —アステカ王国の征服だけではなく、当時の先住民の日常生活を知るためにも貴重な資料である＞に基づいて描かれた。模型は、それによるものと考えられる。模型の前の案内板には、＜メキシコ盆地＞という大文字の後にこう、続けられている。要約してみると、＜自然の資源に恵まれていたこの盆地には、大昔から人が住んでいた。壮大なシエラ・ネバダと荘厳な火山 (Iztaccihuatl, Popocatepetl) が、東方に聳えている。もう少し低い山々が最北端まで続いている。西から南へは、高い山々が連なっている。稜線は松の森で覆われ、鉱脈が豊かな谷間には、いくつかの川がある。北には、3つの塩湖 (Xaltocan, Zumpango y Texcoco テスココ) が、南には淡水湖 (Chalco-Xochimilco) が広がっていた。盆地の居住者を養っていたのは、鳥類、魚、海藻類、メキシコサンショウウオなどの豊かな生物たちであった。

1521年、この盆地は数多くの植民者たちによって占領された。テノチティトランはその中のひとつであった。湖中のこの島は陸地と堤道によって繋がっていた。＞

四方を山々に囲まれたメキシコ盆地が原住民にとって、豊かな自然資源に恵まれた桃源郷であったことがよく分かった。＜大昔し＞とは、いつ頃からであろうか。メキシコ各地には、およそ2万年前に独自の原住民文化が存在した。13世紀に、メキシコ盆地に入っていたというアステカ族（正確には、前記に述べたようにメシカ族。ここでは、アステカ族という名称で統一することにする）以前に、この盆地には、すでに優れた原住民文化が存在していた。アステカ族がテスココ湖中の島であったテノチティトランに居を定め、都市を建設したのが、14世紀初頭であった。彼らは徐々に力を蓄えて、15世紀前半には、メキシコ盆地最大の勢力のひとつとなっていった。アステカ文化は、それ以前の原住民文化を継承したと、言われている。やがて、彼らはメキシコ盆地外の征服活動を開始する。スペイン人侵入時（1519年）には、メキシコ中央部をメキシコ湾岸から太平洋岸まで支配下においた帝国にまで発展した。

B. エルナン・コルテスによる軍事的征服および精神面の征服

上記の案内板の後半の数行は、メキシコ征服史を知らない見学者にとっては、理解できないと、考えられるので、少し以下に解説してみたい。

湖上の都テノチティトランには、陸地から3本の堤道が通じていた。3カ月にわたり、コルテス一行は包囲戦を展開したが、降伏しなかったので、湖南に位置するイシュタバラバから堤道を通して都に入り、猛烈な攻撃を開始した。

1521年8月、アステカ帝国は滅亡した。先の案内板の1521年は、それを指す。なお、スペイン植民地時代には、都市が頻繁に冠水したため、埋め立て事業が行われて、現在の大都市、メキシコシティへと変貌をとげた。

案内板を読み終わってから、模型に縮小されてしまった当時のテノチティトランの都を眺めた。滅亡した帝国に対する哀愁に包まれていくのを感じた。都

はびっしりと隙間なく建物でおおわれていた。真ん中の中央広場を起点として南北、東西へ大通りが走っていた。湖上に堤道が造られ、島と陸を繋いでいた。大通りの両側には、大ピラミッド神殿が天を突くようにそびえていた。壮大なアステカ宮殿は主神殿の隣にあった。模型のピラミッドには、基底部の上に神殿が造られていた。神殿は基底部よりかなり小さく、2層式と3層式があった。基底部はテオティワカンのピラミッドと同じように、傾斜壁と垂直壁の組み合わせ壁であった。アステカ帝国滅亡後は宮殿、神殿はもとより全ての建物が、徹底的にコルテス軍により破壊された。

エルナン・コルテス (Hernán Cortés, 1485? - 1547 年) は、下級貴族の子としてエストレマドゥラ (スペイン中西部地方) に生まれた。一時、サラマンカ大学に学んだ。1519 年 2 月、メキシコ沿岸地域遠征隊の隊長だったコルテスは、スペイン人、先住民、黒人など総勢 600 人の部下を率いてハバナ港 (キューバ) を出港した。途中、アステカ帝国の情報を得たコルテスは、メキシコ最初の植民都市ベラクルスを建設した。そこに築かれた港は、植民地時代は新大陸で得た財宝をスペインへ運んだ港として繁栄した。コルテスは、チリのサンティアゴを建設したペドロ・デ・バルディビアやその他のスペイン人コンキスタドールたちと同じような熱心なカトリック教徒であった。＜ビジャ・リカ・デ・ラ・ベラクルス、Villa Rica de la Veracruz- 真実の十字架の富める町＞と、建設した港町を名付けたのもその表れであろう。先住民の改宗にも、教会建設にも過剰な熱意を示した。アステカ征服に向かうコルテスは、テノチティトラン近くにある古都 Cholula (Cholula, メキシコ中央部) を破壊した。テパナパ大ピラミッドをはじめ、数多くの神殿が破壊された。その上にカトリック教会が建てられた。その数は 365 に達したと伝えられている。Cholula 族はアステカ族と同盟を結んでいた。

メキシコに限らず、スペインのコンキスタドールたちによって征服された中南米諸国で、彼らとともに宣教師、修道士などの聖職者や入植者たちが協力しあって、キリスト教を布教し、豪華絢爛な大聖堂を建設して、植民地社会をスペイン化していった。このように、キリスト教を通して先住民の意識と社会を変容させようとした行為を、フランス人ロベール・リカールは、武力征服と対をなす＜精神面の征服＞だと考えた。的を射た見解である。

拙著＜中米およびカリブ海諸島への巡礼の道＞で、たびたび述べてきたドミニコ会の修道士で、先住民の擁護者だったバルトロメ・デ・ラス・カサス（1484－1566年）は、新世界に30年間とどまった。そして、先住民に対して行われてきたスペイン人による搾取と布教を目の当たりにした。当時、一般的にヨーロッパ人は、＜ヨーロッパを主体とした人類と歴史の体系こそ普遍価値だとする原理的思想＞を抱いていた。その思想に基づいて、スペインや他のヨーロッパ諸国は征服を正当化してきた。ラス・カサスは現地におけるスペイン人のキリスト教徒らしからぬ非人道的な行為を告発して多数の著作を発表して、先住民の保護を訴えた。ラス・カサスはスペインの植民地政策を批判することにより、世界史のヨーロッパ中心史観の構想を根源的に批判していたと、評価されている。それ以降の時代に現出する強国による他国への侵略、植民地支配を考えれば、16世紀のラス・カサスの先見性ある人類史批判は突出していると、言わざるをえない。

およそ、2カ月にわたって攻撃された後に征服されたテノチティトランに話を戻そう。アステカ帝国の大都市テノチティトランの中央広場とほとんど同じ位置に現在のソカロ広場が造られた。また、破壊されたアステカ宮殿の上に、コルテスは彼のための宮殿を建てようと望んだが王室から拒否された。スペイン植民地時代は、副王（スペイン本国から派遣された最高官吏）の住居が

あった。それを裏づけるように、近くにアステカ宮殿の床面が発掘されている。メキシコがスペインから独立してからは、メキシコの政治の中枢としての国立宮殿（大統領宮殿）に姿を変えた。

広場の北側にある壮大な大聖堂を訪れた。ラテンアメリカ最大の宗教建築である。外部は年月の経過を語っているように古びている。スペインにあるいくつかの大聖堂から着想を得たという。スペイン滞在中に訪れた数多くの大聖堂の内部、外部を見学している私には、親しく思われた。しかし、内部に入ると、金色の主祭壇にまず、目を奪われる。異教徒を驚嘆させる目的でこのような豪華絢爛な装飾がほどこされたという。この前で静かに瞑想したり、お祈りが出来るのだろうか、と、ふと疑問が頭をよぎった。

アステカ帝国を滅亡させたコルテス一行は、奪ったばかりの領地をより堅固にし、スペインの強大さを誇示するために、ケツァルコアトル（Quetzalcoatl）神を祀っていた大ピラミッドを破壊して、その上にキリスト教会を建設した。征服してから間もなくの16世紀前半であった。上記の国立宮殿や教会の土台などは、破壊されたテノチティランの建造物の石や壁で築かれたものである。16世紀後半には、教会のまわりに大都市にふさわしいより壮大な大聖堂が竣工された。内部が完成されたのは、17世紀後半であり、外部が完成したのは、1813年であった。ほぼ250年間の長期間にわたって用いられた建築様式は、ゴシック、バロック、ネオクラシック、ルネッサンス、チュリゲーラなど、多様であった。内部には、それらの様式を用いたいくつもの祭壇と礼拝堂がある。一つひとつゆっくり観賞するには、数日間にかかる。

2020年の今、このような歴史的事実を知った後で、ふたたび広大なソカロ広場をぐるっと見渡せば、すでに消滅してしまった大ピラミッド神殿、アステカ帝国宮殿、いくつもの堂々とした建造物、湖の中の浮島などが、目の前にほ

うっと浮かんできては消えていく。万感の思いにしばし、言葉もなく呆然とするばかりであった。この世には、何ひとつ確実なものはなく、全ては夢である といういつもの感慨にひたひたとおそわれた。

(2) アステカ帝国のモクテスマ 2 世、クアウテモック、
テトレパンケツァル

ソカロ広場を出て、目抜き通りのレフォルマ通りをバスが走っているとき、クアウテモックとテトレパンケツァルの像を見つけた。19 世紀半ばにフランス文化の影響を受けて、パリのシャンゼリゼ通りに似せた立派な幅広いレフォルマ通りに槍を手にした先住民戦士の像は、ここがかつては、アステカ帝国であったことを思いださせてくれた。現代メキシコでは、国民的英雄とみなされ、愛されているアステカの戦士たちである。この通りのいちばん目立つロータリーには、ラテンアメリカではお馴染みのコロンブスの立像が建っていた。右手のひらを上に向けて、腕を上げているポーズも、今までよく見てきたものであった。コルテスの像は撤去されたと聞いている。1492 年に新大陸に初めて到達したコロンブスは、いまだに敬意を表されているらしい。

モクテスマ 2 世の記念碑は、 Cholula 付近の プエブラにある。そこは、スペイン植民地時代の名残が漂うスペイン風の町で、大聖堂、教会、ロサリオ礼拝堂など、数多くの植民地時代の建造物に恵まれた観光都市である。

テトレパンケツァル (Tetlepanquetzal, ?-1525 年) は、アステカ帝国最後の皇帝、クアウテモック (Cuauhtemoc, 1495 ころ-1525 年) の傍らで主都テノチティラン防衛のためにエルナン・コルテス軍に立ち向かって闘った。

1519 年 11 月、モクテスマ 2 世 (Moctezuma Xocoyotzin, 1466-1520 年、

アステカ帝国第9代皇帝) みずからが開催したコルテスとの接見式には、大勢の廷臣の中に將軍のクアウテモックとテトレパンケツァルがいた。その後、すでに、コルテス一行らの宿と決めておいた宮殿に案内した。スペイン人一行に対するこのような丁重な接待や金銀、衣服の贈り物などは、先記したように、一行を伝説上のケツァルコアトル神の再来と、おもいこんだことにもよるであろう。しかし、このような歓迎に対してのコルテスの返礼は、迎えられたモクテスマ2世の宮殿で、皇帝を捕縛し、足枷をはめることであった。ラス・カサスによると、囚われの身となったモクテスマ2世を慰めるために、主都テノチティトランにいたアステカ族の首長、廷臣たちは、祭りを催した。宮殿にもっとも近い場所では、帝国の貴族たちが、踊りまわっていた。それを見計らって、スペイン人隊長、ペドロ・デ・アルバラード(拙著、＜中米およびカリブ海諸島への巡礼の道＞を参照)が総攻撃の命令をくだした。それにより、大勢の首長たちの子息たちが惨殺された。その間、コルテスは、無許可にアステカ帝国征服を企てた彼を追討しにやってきたスペイン人隊長を迎撃するためベラクルスにいた。

ついに、アステカのインディオは、今回の殺戮および不正な手口でモクテスマ2世が拘束されたことに怒りを爆発させ、スペイン人に対して攻撃を仕掛けた。今まで、キリスト教徒に対して戦争を仕掛けてはならぬと、部下たちに命じていた俘囚のモクテスマ2世にスペイン人は、回廊へ出て、宮殿への攻撃をやめ、武器を捨てて帰順するよう命じろと迫った。

ラミレスの法典(Fernando Ramírez, 19世紀、メソアメリカ文化の古文献の発見、研究、出版を行った)によると、回廊に出てきたモクテスマ王に＜.....生き延びることのできた数少ない貴族のひとりが、モクテスマに反旗を翻したことを宣言し、彼に向かって叫んだ、愚か者、スペイン人の妾、卑怯者、と.....彼は勇敢な隊長、クアウテモックだった。名前のクアウトル

(Cuautl)は、「鷺」を、テモック(Temoc)は、「下りる」をそれぞれ意味する。.....>

ちなみに、メキシコ建国の歴史を象徴する国旗には、蛇を口にくわえた鷺が、湖上の島に生えたサボテンに止まっている図案が描かれている。これは、つぎのようなアステカ帝国の大都市建設の伝説によるものである。11世紀に移動を続けて勢力を増大させていったアステカ人（メシカ人）が、14世紀にメキシコ盆地にたどりついた。彼らの伝説による神託の地<蛇を口にくわえた鷺が、サボテンに舞い下り、とどまった場所が、未来の繁栄を約束する土地>だった。そこが、テスココ湖に浮かんだ島、テノチティラン、つまり、現在のメキシコシティがある場所である。

クアウテモックは、<舞い下りた鷺>という名前だが、この伝説に関連があるのだろうか。

先の回廊に出ていたモクテスマ王は、反乱を起こした先住民が投げた石が、額に当たって死亡した。一方、この時点で、部下たちに見放されたモクテスマを傍ににおいても、何の役にも立たない、と判断したスペイン人が殺した、という説もある。どちらにしても、アステカ帝国滅亡1年前に、19歳のモクテスマ2世は崩御した。

1520年6月<悲しき夜、Noche Triste>として知られる事件では、湖の堤道上の橋のところで、先住民に襲撃されて、800～900名のスペイン人兵士が死亡した。1年後に、コルテス一行はより強固になって、ここにやってきた。アステカ帝国最後の皇帝クアウテモックは、そのスペイン軍と最後の決戦を行った。その傍らには、テトレパンケツアルがいた。しかし、戦略に優れたコルテス軍とアステカ帝国に反旗をひるがえした周辺諸民族の大群に勝てず、ついに、1521年8月13日にクアウテモックは捕らえられ、ここに、アステカ帝国は滅亡した。現在のメキシコシティには、クアウテモックが捕らえられた場所にコンセプション教会が建てられている。教会の前の銘板には、ここが、

クアウテモックが捕らえられた場所であること、先記の日付が記されている。

クアウテモックとテトレパンケツァルは、モクテスマ王が残した財宝のありかを白状させるためのスペイン人による苛烈な拷問によく耐えた。この残忍な手法は新大陸でコンキスタドールたちが、先住民の王に用いた常套的なものであった。

その場面を具象的に生々しく、刺激的な赤、オレンジ、黄色で、物語的な構成で描いたのが、シケイロス (David Alfaro Siqueiros, 1896 ~ 1974 年) である。メキシコ壁画の巨匠の1人である。ここには、他の画家たちと興した壁画運動の主旨—メキシコ革命 (1910 年) 後の新時代にふさわしい美術を創造し、革命の意義を壁画に描き、広く長く大衆に伝える—が表現されている。一連のシケイロスの壁画には、メキシコ文化のアイデンティティとして、インディオの美的伝統を積極的に表現しようという自覚が表れている。メキシコの歴史が、識字率が低い階層にも理解できるような造形美術は、教育的な効果が高かった。シケイロスの美術には、平明、直接的な手法がとられている。さらに、具象的な事実ばかりではなく、人間存在に対する普遍的な問いかけも見られる。シケイロスは、メキシコ革命に鼓舞され、壁画を制作する一方、政治活動にも没頭した。スペイン内戦 (1936 ~ 39 年) に参加したこともあるし、ハバナに滞在したこともある。1959 年にキューバ革命が起こった。1960 年には、政治活動により 10 年間投獄されたが、その間も制作を続けた。

シケイロスの経歴が分かれば、自ずから、先記のアステカのインディオが描かれた壁画に込められた思いが、ひしひしと伝わってくる。新大陸における被征服者の圧倒的な苦痛のみならず、為政者と被抑圧者の関係、前者に立ち向かっていく反乱者という普遍的な構図までが明らかにされるのである。

はなしを戻すと、クアウテモックは 4 年間、他のアステカ (メシカ) の貴族

とともに、牢に繋がれていた。その間、戦闘に生き残った先住民の待遇を少しでも良くしようとして、彼らとコルテスの仲裁者として奔走した。コルテスは、スペイン人の裏切り者を追跡してホンジュラスに向かった。その遠征隊にクアウテモック、テトレパンケツァル、その他数人の貴族が俘囚者として連れていかれた。その遠征の途中、反乱のかどで、前者ふたりと他のひとりの貴族が絞首刑にされた。1525年2月28日、アステカ帝国最後の皇帝が生涯の幕を閉じたのである。

コルテスは、激しい戦闘で征服した新スペイン（ヌエバ・エスパーニャ）と呼ばれるほど重要視された、メキシコの統治権を強く主張したが、征服地に王権の確立を目指す王室は、彼の主張を認めなかった。

アステカ族の敵対先住民であるマリンチェの間に子どもをもうけたコルテスは、メキシコにメスティソという人種を誕生させた先駆けとなった。アステカ帝国征服後、スペイン人と先住民が混血し、現在の混血メキシコ社会を生み出した。300年にわたるスペイン帝国支配により、メキシコには、スペイン語という言語、宗教（カトリック教）、ヨーロッパ文化（美術、建築、文学、音楽など）、風習、儀式などが伝えられた。そういう意味で、コルテスは否定的だけではなく、肯定的にもっと評価されるべきであるという、メキシコの歴史学者もいる。同時に、先住民の固有言語と風習も失われずに現在まで保持されている。

スペインとポルトガルによる征服により、メキシコだけではなく、中米、南米など、ラテンアメリカには、旧大陸と新大陸のふたつの文化が融合された独特な文化圏が創造されたという、征服を肯定的にとらえる専門家の見方もあることを最後に付け加えておこう。

(3) スペインからの独立戦争 (1810 ~ 1821 年)

独立戦争を仕掛けたのはミゲル・イダルゴ(Miguel Hidalgo, 1753 ~ 1811 年) 神父である。彼に続いたのがモレロス (José María Morelos, 1753 ~ 1811 年) 司祭、イトゥルビデ1世 (Agustín de Iturbide, 1783 ~ 1824 年) で、それぞれ3者が後に銃殺されるという苛酷な運命をたどっている。前者ふたりは、軍人ではなく、聖職者という独立戦争には珍しい立役者である。しかし、それが、メキシコにおける独立戦争の特徴を端的に表しているのである。つまり、メキシコでは、政治と宗教を混同させ、熱狂的な国民的感情によって、独立の自由を獲得するべく抑圧者であるスペイン人と闘ったのである。

1) イダルゴ神父

メキシコの中央にあるグアナファト州のドローレス<悲嘆>村の神父イダルゴは、1811年9月16日に<ドローレスの叫び>を上げ、独立戦争を開始させた。この日は、現在、メキシコ国の独立記念日になっている。イダルゴが教会で撞いた同じ鐘を毎年、メキシコ大統領が国立宮殿で打ち鳴らし<ビバ、メヒコーメキシコ万歳>と叫んでいる。奴隷制廃止を訴え、スペイン植民地時代の遺産を否定した独立戦争の呼びかけに呼応したのは、先住民をはじめとするスペインの圧政に苦しむドローレス村の群衆だった。イダルゴは<.....この国を彼ら(スペイン人)から奪い取る戦争を仕掛けるのだ。.....>と檄を飛ばした。先記したように、メキシコ人はグアダルーペの聖母への敬愛が非常に深い。今回のグアダルーペ寺院を訪れて目の当たりにしたように、現在もその信仰の中心地となっている。早朝の日曜のミサに与っているのは地元の人ばかりではなかった。グループや家族連れなどが各地から来ていた。南北アメリカ大陸の守護聖母として教皇庁から宣言されている。

メキシコでは、グアダルーペ聖母という象徴は、独立戦争が単なる政治運動ではなく、宗教に基礎を持つ運動であることを示していた。そして、南米独立の父と称えられたリベルタドル、シモン・ボリバル（拙著、＜中米およびカリブ海諸島への巡礼の道＞を参照）は、政治と宗教を混合するメキシコ独立戦争独特の考え方を当時、すでに見抜いていた。

熱血漢イダルゴ神父は、教会の説教で群衆の心を動かし、ユートピア的独立に駆り立てた。グアダルーペ聖母図像を軍旗にし、先住民はグアダルーペ聖母像を麦わら帽子に縫いつけた。ほろきれをまとった裸同然の彼らは、まるでアステカ人を連想させるようであったと、言われている。

独立戦争の闘いは、植民地に居住していたスペイン人の財産を略奪したり、彼らを殺りくしたり、残虐な一面があったとされる。そのような残虐な作戦を実行したために、クリオージョ（ラテンアメリカ生まれのスペイン人）階級から支持を失い、戦争の継続が難しくなった。イダルゴ自身はその階級に属していた。後に、逮捕され、軍事裁判と異端審問を受け、1811年7月30日、銃殺された。

イダルゴによる無謀な独立戦争を非難した歴史家がいる一方で、被抑圧者階級による解放戦争および農地改革戦争でもあったと、評価する政治家もいる。

2) モレロス司祭

シウダデラ市場というたくさんの土産物店が寄り集まっている場所をざっと一回りした後、バスの集合時間までかなり時間があつた。街路を隔てた広場は日曜の賑わいをみせていた。音楽が鳴りひびき、地元のメキシコ人であろう中年の男女や女どうし数組みが、ダンスに興じていた。近くのベンチに3人の着飾った、派手な化粧をほどこしたそんなに若くはない女性たちが、時々笑い声をたてながらお喋りをしていた。平日の仕事から解放されて休日を愉しんでい

る仲間同士の気楽さがみてとれた。プエナス タルデス (こんにちは)、と声をかけて仲間にいれてもらった。やはり、彼女たちは、職場の同僚で、今は独身、気楽な身分よ、ここでは、女どうし、ダンスができるし、誰でも参加できるのよ、と初対面とは思えないようなあけっぴろげな庶民的な態度にうれしくなった。今まで訪れた数々の外国で接してきた庶民のオープンさ、うちとけた明るさを、ここ、メキシコでも同じように感じた。

広場の中央に記念碑が建っていた。彼女たちは、モレロス司祭の名前は知っていたが、そこに記されていた<1912年5月2日、クアウトラの包囲百周年記念>の意味を知らなかった。ベンチの傍にいた男性が説明してくれた。偶然にも、観光客にチラシを配るために近くの観光案内所から広場にやってきたのである。当然、メキシコの歴史には詳しかった。モレロス司祭は、銃殺される前に、広場近くにあったシウダデラ拘置所に拘束されていた。

イダルゴ神父の右腕として働いていたモレロス司祭は、イダルゴが処刑された後、反乱軍を指揮した。メキシコシティに隣接する現在のモレロス州 (ベニート・フアレスが共和国大統領に選出されたとき、モレロス进行评估して、彼の名前を命名した)、クアウトラ市にモレロス指揮下、3000名の反乱軍がスペイン植民地王党軍7000名によって、1812年2月19日から5月2日まで包囲されていた。王党軍司令官は、内部抗争により、反乱軍に攻撃を仕掛けることが出来ずにいた。包囲を断念するという書簡を副王に書いたその夜に、反乱軍は脱出した。その理由のひとつには、反乱軍の半分が疫病にかかっていた、と言われている。王党軍の軍事的作戦を失敗に導いたモレロスの交戦は、結果的に新スペインの副王領に政治、軍事、社会的構図の変化をもたらしたと、重要視されている。その後、モレロスはスペイン副王領にとって戦略的に重要な地、オアハカ、Oaxaca とコルドバ、Córdoba を攻略していった。1813年末、

独立戦争の戦況不利にともないモレロスの威勢に陰りが見えてきた。後にメキシコ独立を達成する、植民地駐留スペイン王党軍の士官、アグスティン・デ・イトゥルビデとの交戦で撃破された。シウダデラ拘置所に拘留された後、1815年12月22日に銃殺された。

クリオージョ階級に属していたイダルゴは、スペイン人を植民地から追放して＜君主国メキシコ＞建国を考えていた。しかし、モレロスは下層階級のメスティソ階級に属していたので、＜共和国メキシコ＞建国を望んでいた。植民地時代からの先住民の隷属状態からの解放、先住民と黒人との間の混血（ムラート）の屈辱感からの解放、および黒人奴隷の境遇からの解放など、人種間の平等を求めている。人種差別用語であるインディオ、ムラート、メスティソなどの呼称を廃止し、アメリカーノ（新大陸の人）と平等に呼ぼうと主張した。

19世紀には、モレロスはメキシコの国民性の基礎を作った人物、メキシコの模範的人物であるなどと、高く評価された。

3) メキシコ独立を達成させたイトゥルビデ

イダルゴとモレロスのスペインからの独立計画は、失敗に終わった。植民地駐留スペイン王党軍将校のイトゥルビデは、彼らから独立戦争への加勢を要請されていたが、拒絶していた。しかし、モレロスの死後、6年経った1821年2月、イトゥルビデが中心になり＜軍事クーデター＞が計画された。それまで独立に反対していた高位聖職者、軍人、専門職の人たち、農村や都市部の有力者階級までが、賛同したことにより、短期間で流血をみることなくめまぐるしく状況が変わり成功した。しかも、賛同した者の中には、かつての敵もいた。王党軍の旗印の下で闘っている部隊が、かつての反乱軍と手を組んだのである。こうして、独立戦争をせずに、独立が達成された。

独立軍の象徴として白、緑、真紅を配置した3色軍旗が掲げられた。それは、＜カトリックに敬愛を表す白＞、＜独立を象徴する緑＞、＜スペインに思いを寄せた真紅＞を意味する。さらに、メキシコ国旗の原型になったこの軍旗には、アステカ人の伝説的なメヒコ・テノチティラン帝国建国のシンボル、＜サボテンに止まった鷺が蛇をくわえている＞紋章がつけられていた。ここに、征服以前の歴史と300年にわたるスペイン植民地時代とが和睦したのである。

こうして、メキシコの独立はモレロス死後、6年間の空白期間を経て、達成された。

1821年9月、王党軍と反乱軍からなる＜トリガラランテ—3つの保障＞軍の1万6千人の兵がメキシコの首都に凱旋した。＜3つの保障＞とは、＜すべての社会階層間の結束＞、＜国教としてのカトリック教の唯一性＞、および＜スペインからの完全独立＞である。宗教はスペインから伝播されたものを踏襲し、新国家の統治形態は立憲君主制が採択された。

メキシコが独立した翌年の1822年5月、イトゥルビデはアグスティン1世として戴冠式を挙行了。彼の戴冠は＜独立解放者をねぎらう＞という意味合いを持っていたと言われている。しかし、正統な系譜でない君主の創出であったという理由で、スペインもローマ教皇庁もメキシコの独立を否認し、外交関係も断絶した。こうして、イトゥルビデの先行きに暗雲がたちこめるという事態になった。結果的にアグスティン1世は悲惨な末路を迎えた。それをすでに予想していたのは、南アメリカの植民地を解放したシモン・ボリバルである。自己のリベルタドールとしての立場を冷静に理解していたボリバルは、それでも、イトゥルビデのような平凡な人物が、メキシコ独立のために捧げた人生のため息まじりながらも賛辞を送っている。

その後、アグスティン1世は共和制主義者により1823年、国外へ追放された。ボリバルのように自分の立場をよく分かっていなかった彼は、1年後の1824年、自国へ帰国を試みたが、メキシコ湾の港に到着するとすぐに逮捕された。州議会が軍事法廷さながらに反逆者として銃殺刑を宣告し、同年執行された。

こうして、およそ1000年以上にわたる私の長〜いメキシコの旅が終わろうとしていた。前200年頃かそれ以前には、そびえ立っていたと推定されているテオティワカンのピラミッド遺跡からアステカの帝国、テノチティトラン建国、スペイン植民地時代、そして、メキシコの独立までの1千年以上の歴史の痕跡を、なんと、たったの1日で巡ってしまったのだ。その長い時の流れをどうやって感じとり、足跡を残した人々や事物と向き合い、会話を交わすことが出来るのだろうか。今朝、早暁に到着したベニート・フアレス国際空港に向かって走っているバスの中で、唇をかみしめながら、効率よく作られた旅プランに怒りを覚えていた。メキシコシティは、ラテンアメリカの他の国々でもそうだが、特に、広大な大地をさっと通りすぎるには、歴史がいっぱい詰まり過ぎているのである。

エピローグ

メキシコシティの中心、ソカロ広場にあるキオスクのよく見える場所に今まで何度も見たことのあるチェ・ゲバラのたくさんの写真が飾られていた。プロローグですでに述べたように、ゲバラはメキシコシティに深いかかわりがある。1954年にグアテマラからメキシコに着いた。ここ、メキシコシティでは、街頭写真家として生計を立てることになる。常に興味深い人物との出会いを求めていたチェが、ついにフィデル・カストロとメキシコで運命的な出会いをする。それが、彼の人生に転機をもたらすことになる。この出会いによって、＜安らぎと救いを見いだす＞が、一方では、学者と放浪者と革命家を少しづつやっていたチェは、＜暴力には、武器を＞という考え方に傾いていくのである。1956年11月、カストロおよび他のキューバ亡命者たちとメキシコのトゥспан港を出てキューバに向かった。それから、数年後の1959年、チェはハバナに入り、カストロ指揮下のキューバ革命が成功する。

19世紀後半から、アメリカ合衆国は、イギリスの後釜に座り、中南米諸国の支配者となった。キューバの砂糖生産を支配し、完全に経済的に属国とした。首都ハバナはアメリカマフィアが跋扈する悪徳都市になっていた。そのキューバが革命により、完全にアメリカ合衆国から独立を果たしたのである。サトウキビ生産の農民たちは、藁小屋からトイレ、台所のついた人間らしい家屋に居住するようになった。ラテンアメリカの労働者、農民や学生たちに思想的、精神的な夢を与えたキューバ革命は「ひとつの奇跡」であったと言われている。ラテンアメリカ史におけるこのキューバ革命の意味は大きいというのが専門家の見方である。

しかし、後にキューバは、ソ連東欧型の現実路線の官僚的社会主義体制に転換していった。まさに、その方向転換政策が、理想主義者のチェをキューバか

ら去らせたのである。チェは、他のラテンアメリカの国でロマンティックな革命の夢を実現させようとしたが、失敗に終わった。その背景には、キューバ革命によるアメリカ合衆国と中南米諸国の軍部の危機感があった。また、社会主義革命さえすれば、すべての問題が解決するという楽観的な見方が誤りであることにだれもが気づいた、ともいえる。

メキシコシティのキヨスクに飾られているチェの笑顔は明るかった。多くの革命家、反乱者を生み出してきたメキシコの土壌や、アステカ帝国征服後のスペイン人と先住民の混血によるメキシコ混血社会を考慮すれば、メキシコ人にとってチェ・ゲバラの「混血の思想」は、彼らに共感を呼び起こすのに充分であると思われた。ゲバラ自身が南米人の魂と定義した「半分インディヘナ精神」は、アメリカ合衆国への抵抗思想として強力な武器となってきたのである。越川芳名（アメリカ文学専門）の「偏在するチェ・ゲバラ、映画＜モーターサイクル・ダイアリーズ＞に寄せて」（すばる、2004年11月号）の寄稿文によると、2004年、ゲバラの説いた「混血の思想」は、ラテンアメリカだけではなく、北アメリカでも熱狂的な信者を獲得していた。米国とメキシコの国境地帯では、メキシコ革命（1910～1940年、後に詳細）の英雄たち、エミリアーノ・サバタ（急進的な革命思想を持っていた一筆者）、フランシスコ（通称パンチョ）・ビージャ（メキシコのロビン・フッドと称えられた一筆者）、フランシスコ・マデーロ（民主主義の使徒と呼ばれた一筆者）などに混じって、チェ・ゲバラは生きた「革命の英雄」として機能していた。ボーダーウォッチングをした越川氏は、さまざまなところでゲバラの表象に出会った。それは、北アメリカにおける人種差別に対するメキシコ人たちの抗議の形であった。

越川氏は触れてはいないが、2004年といえば、米同時多発テロ（2001年9月11日）が起こったわずか3年後である。北アメリカはテロとの闘いで巨額

の予算(2021年までおよそ480兆円)をそれにつぎこみ、財政赤字に陥っていった。それを必要とする貧困層に支援の手は届かなかった。そればかりではなく、筆をすすめている現在(2021年)まで、メキシコ人のようなラティーノ(ヒスパニック系)や黒人、アジア系などの有色人種に対する差別、格差が広がっていった。この20年間で北アメリカは、少数の富裕層と多数の貧困層に分断された。たとえば、飲食店の従業員の時給は13ドルぐらいであり、ますます上昇していく物価に対して、いくつもの仕事を掛け持ちしなくてはならないという悲痛の声が聞こえてくる一方に対して、株の上昇により、資産をますます増やしていく富豪がいるのである。

先のキヨスクには、メキシコ革命で英雄と称えられた先住民の血をひくパンチョ・ビージャやサパタの写真はなかった。チェの写真が、いまだに、ここに飾られているというのは、現在でも、チェが時の独裁者と闘った姿勢、および「混血の精神」が機能しているという証拠ではないだろうか。

チェ・ゲバラの「南米旅行日記」を出版した現代企画室の太田昌国(上記の<偏在するチェ・ゲバラ>、すばる、2004年11月号)は、メキシコ南部チアパス州で1994年に武装蜂起したサパティスタこそ、ゲバラの「半分インディヘナ精神」を実践しているゲリラ隊だという。

さて、短期間ではあるが、昨年と今年(2020年)、ラテンアメリカに足を踏み入れ、人々と会話を重ね、歴史を学んでいった私は、ここで、ラテンアメリカの深層構造が、革命や軍事クーデターなどによる暴力で成り立っているということに触れないわけにはいかない。その要因はどこにあるのであろうか。いよいよ、これから重要なポイントを下記に簡潔に述べてみたい。

ひと握りの富裕層と大勢を占める貧困層(先住民、クリオージョ<新大陸生

まれのスペイン人>、メスティソ<白人と先住民の混血>、黒人、ムラート<黒人と先住民の混血>などによって構成されている)の間には、薄い中間層があるというラテンアメリカの特異な社会構成により、市民層の厚いヨーロッパ的民主主義が根づかなかったということは、本文で述べてきた事柄からも容易に想像がつくであろう。ここでは、諸問題の解決のために、民主主義的手段ではなく、過激な武力闘争を繰り広げてきたラテンアメリカの諸事情に基づいた歴史的観点から考えていきたいと思う。

だいいちに、世界の他の地域とは、ほとんど接触がなく独自の高度な古代文化を開花させていたラテンアメリカは、スペイン人、ポルトガル人により武力によって征服されたのである。1492年からの数十年間の征服時代に戦闘意欲があり、旧大陸からの侵入者に抵抗しつづけた古代アメリカ人を除いて、彼らのほとんどが、恭順したか絶滅されたかのどちらかであった。しかし、およそ300年間の植民地時代には、新しい支配者に対する被支配者による激しい武力抵抗運動がたびたび勃発した。特に、好戦的で誇り高く、優れた戦術に長けたリーダーをいただいたアラウカノ族(マプーチェ族)の抵抗は強く、チリ共和国政府とアラウカノ族との間の和解が成立したのは、チリ独立後の1850年であった。

スペイン植民地における特異な階層は、クリオージョであろう。ラテンアメリカにおける武力による革命や独立戦争に深くかかわっているのが、この階層なのである。すぐに思いだすのは、「南米独立の父」と称えられたシモン・ボリバル(拙著<中米およびカリブ海諸島への巡礼の道、その2>を参照のこと)であろう。現在のベネズエラで生まれたクリオージョである。独立戦争を指揮し、祖国ベネズエラをはじめ、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビアからスペイン軍を駆逐した。クリオージョとは、両親はスペイン人だが、スペイ

ン海外植民地で生まれたスペイン系白人をさす。彼らは、常に宗主国スペインで生まれたペニンスラールと呼ばれていた植民地のスペイン人から差別されていた。植民地時代を通じて、少数のペニンスラールが政治的、経済的、軍事的、宗教的な権限を独占していた。両者の間には、このような大きな特権上の差別が生じていたので、クリオージョは新大陸の土地を自らの手で統治できなかった。しかし、植民地時代の経過につれ、クリオージョの数が増えて農業の経営や商業の分野でペニンスラールをしのぐ実力を持つようになっていった。クリオージョの多くは、富裕層に属し、先住民、黒人、メスティソ、ムラートなどの下層階級の上に君臨する支配階級になっていた。先のボリバルは、農園や、鉱山、たくさんの奴隷を所有するベネズエラの大富豪の名家に生まれたが、南米解放戦争のために私財を投じて、ボリバル家は没落してしまった。

長い間、植民地を統治したいと望んでいたクリオージョは、経済的な力を得て、ついに、スペイン人の植民地を解放させるための独立戦争を開始させるために立ち上がった。

メキシコで独立戦争の口火を切った司祭イダルゴは、スペイン人を植民地から追放して新大陸所有権の奪還をめざした。しかし、そこには、人種間の平等を実現するという社会変革の意図はなかった。ただ、クリオージョが抱いていた長年のペニスラールに対する怒り、屈辱感を爆発させただけであった。そのために、イダルゴの指揮による多数のスペイン人殺戮は悲惨きわまるものになった。先住民や下層階級の群衆たちがイダルゴに扇動され、石ころや槍、棒切れを持ち、地方都市、山間部、穀倉地帯など、各地でスペイン本国の王党軍と戦い、植民地に居住していたスペイン人の財産を略奪し、蛮行を犯した。

しかし、やがて、イダルゴの残虐な戦闘作戦は、クリオージョ階層から支持を失い、独立戦争は失敗した。見せかけの宗教心で罪なき群衆を扇動したという理由でイダルゴは、司祭の地位を剥奪され、カトリック教会から破門扱いに

なり、処刑された。

エンリケ・クラウセ（大垣貴志郎＜物語 メキシコの歴史＞より）は、著書＜メキシコの百年 1810-1910 年＞の中で、「メキシコは残酷な国だ、..... 暴力が暴力だけが、唯一、難問を解決する手段だとする恐るべき信条が、その後も幾度となく、この国にくり返されることになる」と述べ、ラテンアメリカに起こる安易な改革の非常手段となっている軍事クーデターや革命に言及している。

ペルーでも、18 世紀末までは、スペイン系住民の大部分がクリオージョであったと考えられている。また、植民地の最果ての僻地のようなプエノスアイレスでも 4 分の 3 がクリオージョであった。そのペルー、ボリビアでは、クリオージョ上級階層に支持された下級のメスティソ階級（先住民とスペイン系白人の混血）に属している首長たち（税や輸入品の料金を住民からとりたてる責任を負わされていた）の反乱がしばしば起こった。これらの反乱は、19 世紀に始まった独立運動とは、性格を異にしていたが、スペインの植民地政府を根底から揺るがし始めた。危機感を抱いた本国スペイン政府の一般民衆に対する約束のひとつに、植民地統治に携わる地方行政官にクリオージョを登用するというものがあった。

一方では、スペインからのラテンアメリカ独立戦争の陰には、つねに植民地時代を通じてスペインの最大のライバル、イギリスがいた。新大陸は、ローマ教皇の承諾を得て、スペイン人とポルトガル人の間で分割独占されていた。

しかし、他のヨーロッパ諸国、イギリス、フランス、オランダはこの取り決めに承認しようとはしなかった。初めから、新大陸に領土を獲得しようと狙っていた。彼らが手始めにしたのは、植民地から本土スペインへ運ぶ船を襲撃しては、貴重な金銀の財宝を略奪することであった。カリブ海域は、とくに、ス

ペイン本国とアメリカ大陸の植民地を結ぶ貿易、軍事上のルートに位置していた。これら北西ヨーロッパ諸国は、スペインの金塊を積んだフロータ船を襲撃したばかりではなく、スペイン領のカリブ海の島々や大陸の港などを襲った。

17世紀にスペイン領であったカリブ海の通称 ABC 諸島は、オランダに、小アンティル諸島およびジャマイカは、イギリスに、それぞれ占領された。また、フランスは、ウィンドワード諸島のマルティニク、リーワード諸島のグアドループのふたつの島をおさえた。このように、つぎつぎと19世紀初めまで、かつてスペイン領であったカリブ海域の島々が占領されていった。これらの島々では、「奴隷制砂糖プランテーション」が始まり、奴隷貿易と砂糖生産が巨大な富を生み出した。17世紀から19世紀のおよそ3世紀の間に、主として西アフリカからカリブ海域に送られた奴隷の数は、およそ400万にも達したと言われている。フランスやイギリスがアフリカ人奴隷の売買の特権をスペイン王室から得た結果であった。とくに、イギリスは、西アフリカから連れてきた奴隷をカリブ海の島々で売るとともに、北アメリカの植民地にも大勢の奴隷を売り込み、三角貿易とよばれている大西洋の貿易循環体系の下で巨額の富を得ていった。

スペイン本国では、1700年に、ハプスブルク家最後の王カルロス2世が崩御すると、スペイン王位継承戦争が起こり、スペインはネーデルランド、南イタリア、要衝ジブラルタルを失ったばかりではなく、イギリスにアメリカ植民地貿易上の特権を与えた。こうして、スペインはヨーロッパにおける強国の地位から脱落していった。それと同時にアメリカ植民地独占体制が崩壊していき、最終的には、アメリカ植民地は、イギリス、フランス、オランダなどの列強に経済的に依存せざるを得ない状況に追い込まれていった。

ポルトガルもイギリスに経済的に従属していき、17世紀末に、植民地ブラ

ジルで発見された大量の金が、貿易赤字の埋め合わせとして、ポルトガルを通して、イギリスにわたった。ブラジルは砂糖の生産、ブラジル綿、コーヒーなど、19世紀に入ってヨーロッパ市場を牛耳るにいたったが、その背後には、イギリス商人がいた。また、ブエノスアイレスの港やラ・プラタ川の河口地帯などの南方に向かって進出を図ったブラジルには、イギリス資本が投下されていた。

このようにして、19世紀初期には、ブラジルもスペインのアメリカ植民地も産業革命期に入った資本主義国イギリスの市場として着実に開拓されていき、スペインやポルトガルの王室は全く無力になり果てていた。

このような状況下で起こるべくして起こったのが、イギリスの陰の援助によるスペインからのラテンアメリカ独立戦争である。すでに先記したような準備が整えられていたのである。

1806年にイギリス艦隊がブエノスアイレスを占領したが、2カ月後には、撤退を余儀なくされた。その時、外敵の侵入に抵抗し、闘ったのは、スペイン国王の軍隊ではなく、クリオージョたちの民兵であった。これを契機にふたつの重要な変化がそれ以降のラテンアメリカにもたらされた。クリオージョの軍事的な自信を高めたことと、イギリスの中南米諸国に対する方向転換である。これから始まる独立運動にイギリスは、背後からそれらの諸国にかかわっていくことになるのである。今までのように、スペイン、ポルトガルに替わって、経済的、軍事的に正面から支配するのではなく その手段はより巧妙になっていく。

独力でブエノスアイレスを守り、自由貿易を望むクリオージョとイギリスの経済的圧力がラ・プラタ地方のスペイン植民地を圧倒し、徐々に独立への気運が高まっていった。イギリスの背後からの勢力の後押しにより、1816年7月「リオ・デ・ラ・プラタ連合州」の独立が宣言された。この数年後には、ブエ

ノスアイレス在住のイギリス人商人が数千人を超え、イギリスとの通商協定が結ばれた。こうして、イギリス製品が盛んに輸入され、プエノスアイレスの牛皮や肉が輸出されたが、イギリスは徐々に土地の買い占めを行い、内陸部への進出を計った。

アルゼンチン独立運動に寄与した南米独立の英雄のひとり、サン・マルティン将軍は1818年4月にチリを独立させた。その後、ペルーの独立のために、準備を整えていたサン・マルティン将軍は、チリのバルパライソ港に集められたイギリス艦船に軍隊を乗せてペルーに向かった。リマで独立宣言をおこなったのは、1821年7月であった。しかし、残存していたスペイン人を消滅させ、ペルーが完全な政治的独立を得たのは、1824年12月、ボリバルによってである。当時の解放された上ペルーは、英雄の名をとり、ボリビアと命名された。しかし、ペルーと上ペルーをひとつにする大ペルー国の大構想を打ち上げたボリバルは、クリオージョの賛同を得られなかった。また、ベネズエラ、コロンビア、エクアドルをひとつにする大コロンビア共和国の構想も受け入れられなかった。死ぬ直前に「世界の大たわけ者は、キリストとドン・キホーテ、そして、この私だ。…… アメリカを治めることは不可能だ。革命のために尽くした人間は、結局海を耕したのだ」という言葉を残している。この言葉には、ラテンアメリカ連合の成立を理想とし、達成されなかったボリバルの深い失望感が表れている。

増田義郎の「ラテンアメリカの歴史」によると、アメリカ独立運動の方向を支配したのは、つねに、クリオージョであった。そのなかでも、大土地所有者、大商人たちであった。その陰で、メスティソや原住民の民衆は置き去りにされた。インディオたちにも、議会の席を与えて、その権利を保障すべきであるという平等思想や革新的な思想は、つねに危険視された。

また、注目すべき重要なことは、アメリカ独立運動は、終始イギリスの影響下に発展したという事実である。当時の産業革命下のイギリスにとって、大西洋の対岸は、商業および投資活動に最適の地であった。しかし、独立運動に直接手を貸すようなことは避けた。武器の供給において積極的に関与し、支援したのである。このようにして、中南米の独立戦争の背後でつねにその動向を見張っていたイギリスは、独立後のラテンアメリカで商業活動を開始して、経済を支配した。とくに、ブラジルとアルゼンチンには、おおぜいのイギリス人が押しかけた。

1828年のアメリカ独立運動以降の中南米諸国の情勢を的確に理解するためのキーワードがふたつある。イギリスとカウディージョである。

はじめに、20世紀初頭まで続いた商業、貿易分野におけるイギリスの中南米支配である。これらの国に滞在していたイギリス商人たちは、ブラジルの綿、砂糖、タバコ、コーヒー、アルゼンチンの皮革、農産物、チリの銅などをヨーロッパに輸出した。そして、ヨーロッパのマニュファクチャー製品を輸入して、リオ・デ・ジャネイロを拠点としてブエノスアイレス、チリのバルパライソ、リマなどに、ヨーロッパ商品が大量に売られていった。

こうして、イギリスの織物工場で製造された廉価なボンチョが、アルゼンチンのパンパで売られ、メキシコでは、肩掛けが売られた。ペルーやボリビアの高地では、婦人用の山高帽が売り込まれた。

イギリスが早くから、経済関係を結び、積極的に投資をおこなってきたブラジルは、飛躍的な経済発展を遂げ、輸出による収入は独立前の10倍以上になった。政治的にもスペイン語圏に比べて比較的安定していた。

つぎは、19世紀に旧スペイン領中南米に多数あらわれたカウディージョに

よる独裁政治である。

独立後、アメリカ合衆国の憲法や、ヨーロッパのナポレオン法典を学び、立派な憲法がつくられたが、運用される現実はまったく異なっていた。法の恩恵に浴する人々は、ほんの少数であり、文盲率のたかい原住民やメスティソ、黒人などは、選挙に参加もできず、基本的人権や法の保護が受けられなかった。彼らは、地域のボスやパトロンの保護に依存しなければならなかった。

まさに、カウディージョとは、私的な軍事力を備えた地方政治のボスであり、子分たちと個人的な関係を結び、政治を支配した独裁者であった。彼らの出自は、ガウチョや良家の大学出のドクターなど、いろいろ異なっていたが、つねに、地主や大商人など富裕なクリオージョ階層の利益をだいいちに考える彼らの代表者であった。しばしば、別のカウディージョが現カウディージョを私兵を使って暴力的に政権を奪うといったような闘争がおこった。19世紀の中南米で革命と称せられていたものは、このような闘争劇であった。

カウディージョのなかでも、よく知られているのは、パラグアイ、アルゼンチン、ベネズエラのカウディージョであろう。彼ら独裁者としての特徴としてあげられるのは、つぎのとおりである。

議会をおかず、大臣も任命せず、裁判所もなしに国を治めた。反対者は密告者や秘密警察によってひんぱんに弾圧され、投獄され、殺された。

たとえば、19世紀半ばごろまで政治を支配したアルゼンチンのカウディージョであったマヌエル・デ・ロサスは、パンパのガウチョから徐々に頭角を表して、指導者となり、手下を増やして、ガウチョの軍隊を整えていった。黒人やムラート（白人と黒人の混血）が密告者として使われ、市民のあいだに入り込み、ロサスの悪口をいう反対者が投獄されていった。

思いだすのは、私がフランコ独裁下（1939～1975年）の70年代にスペインのマドリッド大学に留学中のことである。大学のバルでフランコの悪口を

言っていたら、スペイン人の友だちから、口止めされたのである。こういう学生バルには、スパイが送り込まれていて、密告されるというのである。大学の中庭を騎馬警察隊がよく走り回っていた光景もまるで昨日のように、ありありと脳に浮かんでくる。

さて、先記のロサス支配下におけるブエノスアイレスの3分の1の市民が殺されたという数字もでている。そればかりではなく、この独裁者は、パンパの先住民であった狩猟民を2度にわたり、「掃討作戦」を指揮して抹殺した。先住民の命などにはまったく価値を認めないロサスや白人系の人々により、何千人もの先住民が消滅した。スペイン征服者による先住民の殺戮ばかりが強調されているが、独立後に絶滅させられた先住民は、相当な数にのぼる。

こうして、先住民のいなくなったパンパの広大な土地に、ヨーロッパからたくさん移民が押し寄せ、今日の白人国アルゼンチンができあがった。この広大な土地は、ロサスの徒党たちに分け与えられ、売り買いされて、19世紀後半には、大牧場主がぞくぞくと現れた。こういうアルゼンチンのスペインからの独立後の歴史を知れば、チェ・ゲバラがまず、初めに、アルゼンチンに革命を起こしたかったという構想に賛同できるであろう。また、南米の旅のあいだ中、先住民たちが警戒心もあらわに、白人であるチェや友人にほとんど口を聞いてくれなかったというエピソードもよく理解できるのである。また、チェ・ゲバラ自身もケチュア語などの先住民の言葉が分からず、ついに、彼らと真のコミュニケーションは成立しなかった。

独立運動中には、ボリバルにおおいに助力したベネズエラの独立運動家であるパエスも、ボリバルが去った後は、独裁的なカウディージョになり、長きにわたり、政治を支配した。

独立から20世紀はじめまで、ほとんどの他の中南米諸国と同じように、ベ

ネズエラも、政局が安定せずに、武装蜂起が数十回以上くりかえされたという。簡単に諸問題を武器で解決しようというラテンアメリカの深層は、かなり根深いと思われる。それは、すでに見てきたように、カウディージョによる民主主義的ではない政治支配によるものであろう。親分子分の関係、身内や縁故者の優遇、汚職、公金横領、収賄などによる支配である。

しかし、独立直後のカウディージョ時代から現代にいたるまで現れた数々の独裁者には、強力な政権下、政治や経済を安定させたという一面もあった。

たとえば、スペイン留学中の友人のひとりにチリから来ていたモニカという女の子がいた。首都サンティアゴの中流家庭の出身者であった。当時のチリは、アジェンデ大統領を1973年、軍事クーデターで打倒した将軍ピノチェトの独裁政権下にあった。アジェンデ政権は、世界ではじめて議会制民主主義に基づく社会主義への移行を試みた。アメリカ系資本下の銅産業の無償国有化など、急進的な諸政策を実施したが、激しいインフレ、物資不足などに悩まされて経済危機が深刻化していった。その後のピノチェトは、徹底した自由主義経済の再建を推し進めていたので、当時は経済的に安定していた。しかし、クーデター直後から戒厳令が敷かれ、左派勢力に対して弾圧がおこなわれ、およそ1年間に2万人が殺害されたという。それにもかかわらず、先の友人、モニカは物も豊富になり、生活が安定した今の方が良いと、強調していた。

諸外国の激しい批判により、政治的引き締めが緩和され、戒厳令が解かれたのは、実に4年後の77年であった。今回の「南米、パタゴニアへの旅」でチリでガイドをしてくださった日本人は、ピノチェトの軍事クーデターが起こるとあらかじめ予想された日には外出しなかった、それ以降のチリの生活はずっと豊かになったと、モニカと同じように語っていた。

私の留学中のマドリッドの下宿先の初老のセニョーラは、美しく聡明で信心

深いカトリック信者でフランコと同じガリシア出身であった。フランコ政権下では、物価も安定し、社会も平和で、落ち着いて生活ができると、よろこんでいた。フランコ総統が亡くなった時は悲しんでいた。教会で行われた一般市民と総統とのお別れの日には、長い行列に並んで、哀悼の意を表した。スペインのカトリック教会は、フランコ政権を擁護していた。学生仲間から、フランコは朝食のコーヒーを飲みながら政権の反対者の死刑に署名をするとか、恋人が長い間、拘留されているとか聞いていたので、セニョーラの行動には戸惑いを感じた。

強権政治は、反対者には不当逮捕、拷問、長期の拘留、死刑などの人権侵害の負の側面がある一方で、国を軍隊によって安定させる、経済的豊かさをもたらすなどの良い面もあるらしい。

20世紀初頭のラテンアメリカでは、人口が増加し、メキシコやアルゼンチンの首都は、優雅な大都市に変貌していった。農村では、農村共同体の共有地がどんどん浸食され、大農園が発達していった。農民はそれらの大農園で働く小作人に転落していった。こうして、当時の中南米社会は貧富の差が激しくなり、大土地所有者であるひとにぎりの富裕者、薄い中間層、残り90%以上が下層階級の農民労働者であった。彼らは、苛酷な条件の下で働かされていた。このような社会を支配したのが、寡頭政治であった。この体制を支えたのがすでにみてきたカウディージョ、地方ボスたちである。増田義郎の「ラテンアメリカの歴史」によると、政治的基礎の脆弱な社会で生まれ、私的な軍事勢力を率いて国や社会をまるで自分のもののようにならせたカウディージョによる政治である。そして、現代のラテンアメリカの政治家にその属性が何らかの形で引き継がれていった。

ラテンアメリカでは、20世紀初頭からアメリカ合衆国の台頭が著しくなっ

てきた。イギリス、ドイツ、フランスを追い抜いてラテンアメリカに対する輸出入がトップになった。19世紀におけるイギリスの中南米支配は、おもに経済的なものであった。アメリカ合衆国の場合は、経済支配および、それを維持するための政治介入があった。

すでに、先記したように、中南米諸国のなかで、もっとも早くから、もっとも強烈なアメリカ合衆国の介入を受けたのが、カリブ海最大の島、キューバであった。キューバでスペインからの独立戦争が始まったのは、1868年で、10年間続けられた。その間にアメリカ資本がどんどん入り、キューバの主要産業である砂糖生産がアメリカの経営に支配されたのである。その頃、まだキューバを植民地にしていたスペインに対して、アメリカは宣戦布告をし、1898年、キューバを占領し、事実上の属国としてしまった。それにより、キューバの砂糖産業は繁栄したが、貧富の差は拡大し、農民の貧困は深まった。

1903年、パナマがコロンビアから分離独立したが、その背景にも、アメリカ合衆国の画策があった。軍事的にもカリブ海をおさえ、パナマ地峡に運河（中米およびカリブ海諸島への巡礼の道、その2を参照）を築いてアメリカの東部と西部を海路で結んだのである。その後、アメリカ合衆国は、カリブ海諸国や中米のカウディージョたちの支配による寡頭政権を支持し、アメリカ企業の活動を確実に保障しようと試み、積極的に干渉していった。

それにより、カリブ海諸島や中米の輸出入の主要な取引国は、アメリカ合衆国となり、完全に経済的に支配する状態になった。

南米においても、古い前近代的な社会政治の構造が維持されて、貧富の差はますます拡大していった。

やがて、そのような状況下で、都会の中間層や労働者階級、いちぶの農民のなかから自分たちの生活の向上や古い体制の変革を求める声が上がった。ま

た、社会主義や共産主義の思想もはいつて、政治運動がおこり始めた。

こうした運動を指揮した政治家たちのなかに、アルゼンチンのフアン・ペロン (Juan Domingo Peron, 1895-1974 大統領在任、1946-55, 73-74) がいた。まだ、前代のカウディージョ風のカリスマ性を備えた人物であった。

ヨーロッパから来たたくさんの移民たちのなかの少数は、アルゼンチンのパンパの開発を担った大地主と大牧場主の独占と保護の下に下層労働者として住み着いた。他の多数のものたちは、ブエノスアイレスや地方都市の下層、中層の市民となった。こうして当時のアルゼンチンでは、パンパを占有する少数の富裕者と都市の労働者、中間層という貧富の差が大きい社会構造が形成されたのである。

ペロンはブエノスアイレスの陸軍学校を卒業した職業軍人であった。軍事史家として頭角を現し、軍事研究のためにイタリアに派遣され、ムッソリーニのファシズムに共鳴した。軍の秘密結社の有力なメンバーとなり、この結社の主導した 1943 年 6 月の軍事クーデターに参加し、軍人内閣の労働大臣となった。1946 年には、ファシスト的組合理想の発想を持っていたペロンが組合や労働者の支持を受けて、大統領選に当選した。大土地所有者や外国企業に反対して、労働者大衆の権威的な政治家となった。ペロンは大衆を扇動して熱狂させる才能を持ち、大衆のアイドルとなった。しかし、ペロンも反対者には苛酷な抑圧者であり、(私が今回訪れた) あの広大な氷に覆われたパタゴニアの大地に強制収容所をつくって投獄した。

1946 年、ペロンが大統領になった年に、チェは医学部に入学した。ペロンの本質を見抜いていたチェと友人のアルベルトは、「南米旅行日記」の中でたびたびペロンの独裁政権を批判している。そして、ペロン政権下のアルゼンチンで医師になることを拒否さえしている。

ペロンは、1955年9月、軍のクーデターにあって失脚したが、1973年には、大統領の座にふたたび就いた。インフレやテロなどの社会的不安に見舞われていたアルゼンチンの諸問題を解決する具体的な対策を打ち出せないまま74年に死亡した。

増田義郎は20世紀後半のアルゼンチン政治はペロンなしには論ぜられないとまで、述べておられる。

第2次世界大戦と戦後、アメリカ合衆国のラテンアメリカに対する「善隣政策」が功を奏して、両者の関係が好転したが、反米感情は残ったままであった。大戦後の1960、70年代にアルゼンチン、チリ、メキシコ、ブラジルなどの国々は、工業化の道を進んだが、社会不安と政治対立がひどくなった。

大戦後、大衆、労働者、中間層を中心とした人々により新しい型の政治の出現が要求され、斬新な改革主義の政治が試みられたが、旧支配層の抵抗に阻まれて、なかなか実現しなかった。

このような情勢下の1959年、キューバ革命がおこったのは、先記したとおりである。アメリカ合衆国から完全に独立したキューバを見て、ラテンアメリカの人々は、「アメリカ帝国主義」からの真の自立の道だと考え、労働者や学生たちは革命を祝福した。

1960年代は革命の高揚期だった。不正と圧政に苦しんでいる世界中の民衆を解放したいというロマンティックな革命の夢を実現しようとしたラテンアメリカの若もののひとりにチェ・ゲバラがいた。

こういうラテンアメリカ世界の動きに危機感を抱いたのは、アメリカ合衆国のみならず、ラテンアメリカの軍部であった。

1961年、キューバの工業相だったチェは、ウルグアイで「反帝国主義」の

演説をおこなった。1964年には、ニューヨークの国連総会でラテンアメリカの解放について演説した。1965年にはアフリカ諸国を歴訪した。1966年、チェはボリビアでゲリラ活動をおこなっていたが、アメリカ合衆国の軍事援助を受けてボリビア政府は多数の軍勢で立ち向かった。1967年にチェらゲリラ兵は捕らえられ、翌日には、当時のボリビア大統領バリエントスの命令でチェは処刑された。バリエントス政権は軍事クーデターにより樹立されたものであった。その後のボリビアで、親米政策の長期間の軍事政権や軍事クーデターなどの紆余曲折を経て、民政移管がおこなわれたのは、1982年であった。

チリでは、先記したように、70年、はじめて選挙による左翼政権が成立した。アジェンデ大統領は反帝国主義、反寡頭制を掲げ、議会による民主的手法による社会主義社会の実現を目指した。しかし、アメリカ合衆国系の産銅会社や民間銀行の国営化、徹底的な農地改革による地主制の解体など、さまざまな政策が早急に実行に移されたために、国の内外でこれを妨げようとする動きが強まっていった。報復として、アメリカ合衆国のニクソン政権は、経済援助や融資を停止した。国内でも全国的なストライキが起こった。このような状況下の73年、陸海空3軍と警察によるクーデターが勃発したのである。それには、ニクソン政権をはじめとする外国の干渉があった。アメリカ合衆国は、アジェンデ政権期間に多額の資金を用いて、チリ国内の反対勢力を援助して、＜不安定化＞工作をおこなった。

ピノチェト政権下の1980年に発布された憲法の改正を求めて昨年（2019年）からサンティアゴではデモが盛んになってきたが、今年10月におこなわれた国民投票により、2022年に改正されることになった。およそ80%の国民が改正を望んだ。

アルゼンチンでも1966年と1976年に同じように軍事クーデターがおこった。

それぞれ7年間にわたって軍政が維持された。文民派のテクノクラートの支持を得た軍部が、強権的に経済や政治を動かしてきたのである。大土地所有者が主要な支持基盤であったが、労働者階級の政治的な強大化におそれを抱く中間層も軍政を支持していた。しかし、76年の軍部による苛烈な独裁政権による人権抑圧に対しては、保守的なカトリック教会や一般市民が立ち上がり、抗議した。ブエノスアイレスの大統領官邸前の5月広場に集まって、政府を告発してきた母親たちのデモは、軍政の人権抑圧を国際的にアピールし、84年の民政移管を促していった草の根的運動として、高く評価されている。

ウルグアイはラテンアメリカのなかでは、政治的に安定した民主国家として知られている。しかし、1973年には、軍事クーデターがおこり、大統領制から軍政に移行した。議会が閉鎖され、共和国の歴史上まれなこの軍政は85年まで12年間続いた。しかし、先記した他の南米諸国の軍政よりも軍事色は薄かった。左翼グループに対する弾圧もチリやアルゼンチンほど苛烈ではなかった。これは、国民が民主主義への根強い希望を持っていたからである。軍部の政治介入の制度化を目指した憲法の改正が、80年、国民投票で否決された。この後、軍部は民政へ移管する作業をすすめ、84年末には、総選挙が実施された。

メキシコでは、すこし状況が違う。1910年から1940年までの30年間にわたり、メキシコ革命がつづいた。長期独裁政権に終止符を打ったが、国民同士が殺傷しあい、1928年までのあいだに、民主主義の使徒と呼ばれたフランシスコ・マデロ、メキシコのロビン・フッドと称えられたパンチョ・ビージャ、急進的な革命思想を持ったエミリアーノ・サパタなど3人の要人が暗殺されるという暴力的で破壊的な運動となった。キューバ革命を除いて、このような革命は他のラテンアメリカ諸国では起こっていない。ロシア革命とも比べられる

ほどの凄惨を極めていたと、いわれている。彼らは、それぞれ、富の不当な分配構造、メキシコに根づく不正への異議を申し立て、政治の民主化、農民への土地の再分配などの農地改革を強く求めた。

伝統的なカウディージョであった独裁者を打倒して1911年11月に大統領に就任したフランシスコ・マデロは、20世紀メキシコに民主主義を樹立しようと試みたが、その政権はわずか15カ月間維持されただけだった。

旧守派の抵抗により、マデロ政権の下で政情が不安になってきたのにつけこみ、アメリカ合衆国は旧守派と合意してメキシコ政府転覆を画策した。1913年、マデロ大統領は反政府軍により大統領府に軟禁された。そのため、数日間、メキシコシティは政府軍と反乱部隊が引き起こした騒乱状態に陥り、多くの市民が犠牲者になった。このようにして、アメリカ合衆国は民主主義の理念に反した旧守派政権の台頭を擁護し、メキシコ革命への干渉政策をとったのである。現在（2021年）でこそ、アメリカ合衆国は、民主主義の理念を、そうではない国々、たとえば、中国やロシア、に対して高く掲げてはいるが、本質はどのようなのであろうか、見極めていかなければならないと思う。

先のマデロ大統領は軟禁された十数日後に銃殺された。その後、先記したように長い革命期間が続いた。長期間にわたったメキシコ革命は社会をさまざまに変革した。1917年憲法の発布は、メキシコ革命を象徴する改革精神の集大成であったと、大垣貴志郎は、「メキシコの歴史」のなかで述べている。

1940年に最後の軍人出身大統領が選出された頃には、軍部は国政へ干渉する圧力団体としての影響力は失っていた。1946年以降の歴代の大統領は、すべて文民出身である。

過去も現在も波瀾万丈に富んだラテンアメリカになかなか目が離せないというのが、私の率直な思いである。その陰には、常にその時々強大な外国勢力

が干渉し、影響力を持っていたことはすでに見てきたとおりである。

先月 11 月 (2020 年) にアルゼンチンの元サッカー選手で神の子と称えられたマラドーナ (「南米大陸、最果てのパタゴニアへの巡礼の道、その 1」の「カミニート、ボカ地区、タンゴ発祥の地」を参照ください) が 60 歳で病気により死亡したと報じられた。まだ、そんなに若かったのかと驚いた。スペイン留学中の 80 年代前半には、すでに有名な現役の選手でスペイン人も夢中であった。男たちが興奮してマラドーナについてしゃべっていたのを昨日のことにように思いだしている。アルゼンチンでは 3 日間の喪に服するという。遺体にお別れしようと長い行列ができたが、時間切れでできなかった者たちによる騒動まで持ち上がった。ラテンアメリカのお国柄の一面を見たような気がした。

こういうわけで、私のラテンアメリカへの旅はまだまだこれからも続くであろう。チェのキューバ、インカ帝国のペルーが私をしきりに呼んでいる。

参考文献

モーターサイクル南米旅行日記。チェ・ゲバラ。棚橋加奈江訳。現代企画室。東京。
2004 年。

第 2 回 AMERICA 放浪日記 ふたたび旅へ。チェ・ゲバラ。棚橋加奈江訳。現代企画室。
東京。2004 年。

ゲバラ日記。チェ・ゲバラ。高橋正訳。角川文庫。東京。1999 年。

ゲバラ。アラン・アマー。廣田明子訳。原書房。東京。2004 年。

スペイン現代史。若松隆。岩波新書。東京。1992 年。

物語 スペインの歴史。岩根囀和。中公新書。東京。2002 年。

物語 メキシコの歴史。大垣貴志郎。中公新書。東京。2017 年。

物語 ラテン・アメリカの歴史。増田義郎。中公新書。東京。2017 年。

ラテンアメリカを知る事典。平凡社。東京。1987 年。

パタゴニアに行く。野村哲也。中公新書。東京。2011 年。

エリザベス、ELIZABETH。トム・マグレガー。新潮文庫。東京。1999 年。

エリザベスとエセックス。リットン・ストレイチー。中公文庫。東京。1999 年

グレートジャーニー、人類 5 万キロの旅。関野吉晴。角川文庫。東京。2010 年。

地球の歩き方、アルゼンチン、チリ、パラグアイ、ウルグアイ。1018-19 年。ダイヤモンド・ビッグ社。東京。2017 年。

チェ・ゲバラとキューバ文学の挑戦「偏在するチェ・ゲバラ」。越川芳明。すばる 11
月号。集英社。東京。2004 年。

-*Viaje por Sudamérica*. Ernesto Che Guevara, Alberto Granado. Editorial Abril. La
Habana (Cuba). 1992.

-*Inés del alma mía*. Isabel Allende. Penguin Random House Grupo Editorial. Barcelona,
España. 2005.

-*Cartas de la conquista de México*. Hernán Cortés. SAEPE. Madrid España.



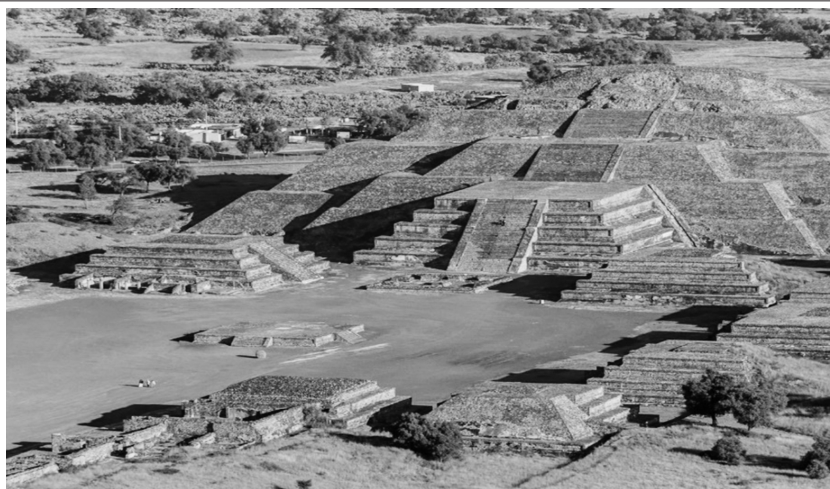
バルパライソ、チリ



大統領府、モネダ宮殿、サンティアゴ、チリ



アルマス広場のカテドラル、サンティアゴ、チリ



太陽と月のピラミッド、テオティワカン、メキシコ



Monumento a Cuauhtémoc,

アステカ王国の最後の皇帝、クアテモック、メキシコシティ（左）

アステカ王国遺跡。ソカロ広場、メキシコシティ（下）



2. DOS CAMINOS: BUDISMO Y CRISTIANISMO (III)

(Ensayo desde una hermenéutica cristiana)

Por Bernardo Villasan

INTRODUCCIÓN

Intentamos aproximarnos a los conceptos básicos de la creencia budista y cristiana a través de la contrastación de los textos básicos. El budismo según la definición léxica se refiere a la doctrina filosófica y religiosa, derivada del brahmanismo, fundada en la India en el siglo VI a. C. por el *Buda** Gotama.

La rueda del Dharma es la traducción del Sánscrito de la palabra “Dharmacakra”. Los ocho rayos de la rueda representan los Ocho Nobles Caminos del Budismo (correcta visión, correcta aspiración, palabras correctas, conducta correcta, esfuerzo correcto, pensamientos correctos y concentración correcta).

(Todas las negritas y subrayados son del autor).

* *Buda*: (en sánscrito बुद्ध buddha, “despierto o iluminado”) como epíteto caracteriza honoríficamente a quien ha logrado un completo despertar trascendiendo el deseo y todo tipo de aversión o confusión. Se aplica a aquel que ha eliminado por completo todas las perturbaciones mentales y las impresiones grabadas en su mente y que ha alcanzado la sabiduría y el conocimiento perfecto. Según el budismo todos los seres tienen el potencial de convertirse en Buda. Shakyamuni fue un ser humano que despertó a la verdad y por tanto se convirtió en Buda, en este sentido hubo una transformación. De hecho en el budismo se relata que Buda Gautama no ha sido el único buda ya que el canon pāli se refiere al buda Gautama como

I. -LA ENSEÑANZA DE BUDA" DHARMA"-

CAPÍTULO TERCERO: LA NATURALEZA DE BUDA

I. EL ALMA PURA

1. Hay muchas clases de hombres. Hay hombres que tienen el alma oscurecida y otros que la tienen limpia. Los hay inteligentes e ignorantes. Hay hombres de carácter bueno y también los hay de carácter malo. Hay unos que reciben fácilmente la Enseñanza, otros que tardan mucho en asimilarla. Podemos compararlos con lotos de flores rojas, amarillas y blancas que florecen en los estanques. Unos nacen en el agua, crecen en el agua y no logran salir a la superficie. Otros nacen en el agua, crecen en el agua y florecen en la superficie. Hay otros que nacen en el agua, crecen en el agua y florecen muy por encima de la superficie sin ser manchados ni siquiera por el agua en donde crecerían. Además de estas diferencias existe también la del sexo, pero no es algo esencial. La mujer, tanto como el hombre, si practica la verdadera senda, llegará a la Iluminación.

Para amaestrar a un elefante es menester tener confianza, salud, diligencia, sinceridad e inteligencia. Para alcanzar la Iluminación siguiendo a Buda es también necesario tener las mismas cualidades. Con ellas, los hombres de todos los caracteres, sin diferencia de sexo, no precisarán largos años de aprendizaje para llegar a comprender las Enseñanzas de Buda. Esto es porque todos tienen la naturaleza que lleva a la Iluminación.

(De: "La enseñanza de BUDA". DHARMA. CAPÍTULO TERCERO: LA NATURALEZA DE BUDA. BUKKYO DENDO KYOKAI, 2006.)

I. HERMENÉUTICA CRISTIANA

-“Hija mía, nada has dicho de la creación del hombre, de la obra maestra de la Potencia creadora, donde el Eterno, no a gotitas, sino a olas, a ríos ponía su Amor, su Belleza, su maestría y llevado por el exceso de amor se ponía a Sí mismo como centro del hombre; pero Él quería al hombre como una digna habitación, ¿qué hace entonces esta Majestad Increada? Crea al hombre a su imagen y semejanza, y desde el fondo de su Amor hace salir un respiro y con su aliento omnipotente, con él, le infunde la vida, dotando al hombre de todas sus cualidades, proporcionadas a criatura, haciéndolo un pequeño dios.” Febrero 24, 1919 (LP)

-“Porque tú debes saber que todas las cosas y la misma naturaleza humana toman del movimiento eterno de Dios, de modo que todo gira a su alrededor, toda la Creación, el respiro, el latido, la circulación de la sangre, están bajo el imperio del movimiento eterno, y como todos y todo tienen vida de este movimiento, son inseparables de Dios, y como tienen vida, con una carrera unánime giran en torno al Ente Supremo, así que el respiro, el latido, el movimiento humano, no está en poder de ellos el respirar, latir, moverse, quieran o no quieran, estando bajo el movimiento incesante del Eterno sienten también ellos el acto incesante del respiro, del latido y del movimiento, se puede decir que hacen vida junto con Dios y con todas las cosas creadas que le giran en torno sin jamás detenerse;...” Mayo 12, 1934 (LP)

2. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 3)

2. En la práctica del camino hacia la Iluminación, los hombres miran a Buda con sus propios ojos y creen en Él con su propia **alma**. Y son también estos ojos y esta alma los que hacen que el hombre vague errante por este mundo de vida y muerte. Para que un rey pueda derrotar a los invasores que entraron en su reino, antes es preciso que conozca el lugar donde se esconden éstos. De la misma forma, el que quiera aniquilar sus pasiones necesita conocer primero su origen.

Cuando un hombre está en casa y abre sus ojos enseguida se dará cuenta de lo que hay en el interior de su habitación y sólo después, de lo que está más allá de la ventana. No hay ojos que miren afuera sin ver antes lo de adentro.

Si suponemos que **el alma** está dentro del cuerpo, deberíamos saber detalladamente lo que ocurre dentro de nosotros, pero los hombres ven sólo lo que ocurre fuera de ellos, y no saben casi nada de lo interno. Consecuentemente no podemos decir que el alma esté dentro del cuerpo. Sin embargo, si el alma estuviera fuera del cuerpo, el cuerpo y el alma estarían separados, y lo que sabe el cuerpo no lo sabría el alma, y viceversa. Pero la realidad es que lo que sabe el alma, el cuerpo lo siente y lo que siente el cuerpo, lo sabe el alma. No se puede decir que el alma esté fuera del cuerpo. Entonces, a fin de cuentas, ¿dónde está realmente el alma en sí?

2. HERMENÉUTICA CRISTIANA

*“Yo soy la Reina del Cielo. Ama a mi Hijo, porque él es el honestísimo y cuando lo tienes a Él tienes todo lo que es honesto. Él es lo más deseable y cuando lo tienes a Él tienes todo lo que es deseable. Ámalo, también, porque Él es virtuosísimo y cuando lo tienes a él tienes todas las virtudes. Te voy a contar lo hermoso que fue su amor hacia **mi cuerpo y mi alma** y cuánto honor le dio a mi nombre. Él, mi hijo, me amó antes de que yo lo amara a Él, pues es mi Creador. Él unió a mi padre y a mi madre en un matrimonio tan casto que no se puede encontrar a ninguna pareja más casta.*

Nunca desearon unirse excepto de acuerdo a la Ley, sólo para tener descendencia. Cuando el ángel les anunció que tendrían una Virgen por la cual llegaría la salvación del mundo, antes hubieran muerto que unirse en un amor carnal pues la lujuria estaba extinguida en ellos. Te aseguro que, por la caridad divina y debido al mensaje del ángel, ellos se unieron en la carne, no por concupiscencia sino contra su voluntad y por su amor hacia Dios. De esta forma, mi carne fue engendrada de su semilla a través del amor divino.

*Cuando mi cuerpo se formó, Dios envió al **alma** creada dentro de Él desde su divinidad. El alma fue inmediatamente santificada junto con el cuerpo y los ángeles la vigilaban y custodiaban día y noche. Es imposible expresarte qué grandísimo gozo sintió mi madre cuando mi alma fue santificada y se unió a su cuerpo. Después, cuando el curso de mi vida estuvo cumplido, mi Hijo primero elevó mi alma, por haber sido la dueña del cuerpo, a un lugar más eminente que los demás, cerca de la gloria de su divinidad, y después mi cuerpo, de forma que ningún otro cuerpo de criatura está tan cerca de Dios como el mío.” Capítulo 9. (LRC)*

3. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 3)

3. Los hombres se encuentran sumergidos en la ignorancia a causa de su pasado y de dos errores fundamentales. Primero, ellos piensan que su alma discriminante, que se encuentra a la raíz de esta vida de nacimiento y de muerte, es su verdadera naturaleza. En segundo lugar, ellos no conocen que poseen dentro de sí un alma pura que es su naturaleza real. Cuando el hombre levanta el brazo con el puño cerrado, los ojos lo ven y el alma se peca. Pero esta alma que se peca, no es el alma verdadera; es el alma que discrimina. El alma discriminante nace del deseo. Es el alma que piensa en su conveniencia; es el alma que nace de una serie de condiciones y causas. No tiene naturaleza verdadera y es mutable. Cuando el hombre considera que ésta es la verdadera alma cae en la ilusión. Seguidamente, si abrimos el puño, el alma se peca de que el puño ha sido abierto. Entonces, ¿es el alma o la mano la que se mueve? ¿O ninguno de los dos? La mano se mueve cuando el alma se mueve, y juntamente con el movimiento del alma, la mano se mueve. Sin embargo, el alma que se mueve no es el alma verdadera, es un alma superficial.

3. HERMENÉUTICA CRISTIANA

-“Permaneced en la paz pensando en el amor de Dios que sostiene vuestra debilidad con el poder de su gracia y, ciertamente, con mayor abundancia en esas horas en las que el estímulo de la carne o el ángel de Satanás vienen a insinuaros el pensamiento de que, no obstante los dones sobrenaturales o extraordinarios, el hombre continúa siendo hombre, o sea, criatura en la que su naturaleza espiritual divinizada por la gracia se encuentra enfrentada a la humana sojuzgada por los desordenados apetitos de la concupiscencia, por lo que vosotros no podéis permanecer fieles a la justicia. Continuad indiferentes a estas voces inferiores o satánicas que os hablan para desanimaros, seguid en la paz y no os turbe el hedor de las miasmas del mundo y de Satanás.” (MVL) cap. 7

633. Estos y otros efectos causaba esta visión Divina en nuestra soberana Reina con grado tan eminente, que no puedo yo explicar mi concepto con los términos ordinarios. Pero déjase entender algo considerando el estado de aquella alma purísima, donde no había impedimento de tibieza ni óbice de culpa, descuido, ni olvido, ni negligencia, ni ignorancia, ni una mínima inadvertencia; antes estaba llena de gracia ardiente en el amor, diligente en el obrar, perpetua e incesante en alabar al Criador, solícita y oficiosa en darle gloria y dispuesta para que su brazo poderoso obrase en ella sin contradicción ni dificultad alguna. (MCD) Capítulo 14.

-“Tu alma estará llena de mí y Yo estaré en ti, todo lo temporal se volverá amargo para ti, y el deseo carnal te será como el veneno. Descansarás en mis divinos brazos, donde no hay deseo carnal sino sólo gozo y deleite espiritual. Ahí, el alma, colmada tanto interior como exteriormente, está llena de gozo, no pensando en nada ni deseando nada más que el gozo que posee. Por ello, árame sólo a mí y tendrás todo lo que desees en abundancia”.Capítulo 1. (LRC)

4. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 3)

4. Todos los hombres están dotados de un alma pura que es su fundamento último, pero está cubierta con el polvo de la duda e ilusión, originado por condiciones y causas externas. Esta alma manchada no es nuestra verdadera naturaleza; es algo añadido, un huésped que no puede ser identificado con el dueño. Aunque las nubes cubran la luna por un tiempo largo, no la manchan ni la pueden mover. Por ello el hombre no debe pensar que el alma voluble y cubierta de polvo es su propia esencia. El hombre debe despertar en la naturaleza del alma pura de la Iluminación y volver en sí. Los hombres vagan errantes por el mundo de la ilusión porque se dejan arrastrar por el alma manchada y voluble. Las impurezas y los movimientos del alma humana, tienen su origen en el deseo y en las reacciones a las circunstancias mutables de la vida.

El alma verdadera del hombre, el dueño, el anfitrión, es el alma que no tiene nada que ver con los cambios de las circunstancias. Permanece eternamente inmutable e indestructible. Así como no se puede decir que desaparece la posada cuando se va el viajero, no es posible decir que desaparece el yo verdadero porque deja de existir el alma discriminante que aparece y desaparece según las circunstancias mutables de la vida. El alma que se cambia porque se cambiaron las condiciones, no es el alma verdadera.

4. HERMENÉUTICA CRISTIANA

-“Por tanto, el alma pura, cauta, y sencilla y humilde, con tanta fuerza y cuidado ha de resistir (y desechar) las revelaciones y otras visiones, como las muy peligrosas tentaciones; porque no hay necesidad de quererlas, sino de no quererlas para ir a la unión de amor. Que eso es lo que quiso decir Salomón (Ecli. 7, 1) cuando dijo: ¿Qué necesidad tiene el hombre de querer y buscar las cosas que son sobre su capacidad natural? Como si dijéramos: Ninguna necesidad tiene para ser perfecto de querer cosas sobrenaturales por vía sobrenatural, que es sobre su capacidad.” (SMC) Cap. 27.

-“...Conoceréis hombres doctos en las cosas del mundo e ignorantes de las cosas celestiales, y por lo tanto presuntuosos. Conoceréis a sencillos, en ellos la fe estará clara porque no es la ciencia terrena la que va a mostrar el rostro de DIOS, y así mi rostro, que es el mismo rostro. Yo en el Padre, unidos en el Espíritu, el misterio de la Trinidad para vosotros. Es el alma pura la que, estando en gracia, sabe ver mi rostro, ¡es el simple quien confía en mí!” (LPC) 25 de Enero de 1979,15 hs.

-“¡Ah! hija mía, en mi Voluntad las cosas cambian naturaleza, así que el hielo en mi Voluntad tiene virtud de destruir cualquier cosa que no sea digna de mi Santidad, y vuelve al alma pura, nítida y santa, tal como me gusta a Mí, no según le gusta a ella. Ésta es la ceguera de las criaturas, y aun de aquellas que se dicen buenas: Al sentirse frías, miserables, débiles, oprimidas y demás, y por cuanto más se sienten mal, tanto más se agazan en su voluntad ...” (LP) Marzo 16, 1913

5. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 3)

5. Pensamos en una sala de conferencias que se aclara con la luz del sol y se oscurece cuando el sol se oculta. Podemos devolver la claridad al sol, la oscuridad a la noche, pero el poder de reconocer la claridad y la oscuridad, hay que devolverlo a la naturaleza misma del alma, a su esencia. El alma que se peca de la claridad cuando aparece el sol es un alma temporal. Y, cuando se oculta el sol, la que se peca de la oscuridad es también un alma temporal. De esta forma, las sensaciones del alma que se peca de la claridad y de la oscuridad, son inducidas por una condición externa. El alma que ve la claridad y la oscuridad es un alma temporal, que no es verdadera ni real. El poder para percibir el claro-oscuro es el alma verdadera. El bien y el mal, los sentimientos de amor y odio, que aparecen y desaparecen originados por agentes externos, son sólo reacciones momentáneas fruto de las impurezas acumuladas en el pasado. Se parecen al polvo que flota y va de un lado a otro como un viajero. Dentro de este polvo flotante está el alma verdadera y pura, sin ser manchada ni teñida en lo más leve. El agua se vuelve redonda cuando la ponemos en un recipiente redondo y cuadrada cuando la ponemos en un recipiente cuadrado. Sin embargo, no es que el agua tenga formas cuadradas ni redondas. Los hombres olvidan que el agua no tiene forma y piensan en la forma. Los hombres piensan en si algo es bueno o malo, en si le gusta o no, en si existe o no. Sufren dominados por estas ideas y esclavizados por sus puntos de vista porque persiguen sólo lo externo.

Si se devuelve estos conceptos esclavizadores a las condiciones externas, se descubrirá la verdadera naturaleza del hombre y se podrá alcanzar un estado de paz y libertad para el alma y el cuerpo.

5. HERMENÉUTICA CRISTIANA

-“Ánimo hija mía, el alma verdaderamente mía no sólo debe vivir para Dios, sino en Dios. Tú busca vivir en Mí, porque en Mí encontrarás el receptáculo de todas las virtudes, y paseando en medio de ellas te alimentarás de su perfume, tanto, de quedar llena de ellas, y tú misma no harás otra cosa que enviar luz y perfume celestial, porque el vivir en Mí es la verdadera virtud, y tiene virtud de dar al alma la misma forma de la Divina Persona en la cual hace su morada, y de transformarla en las mismas virtudes divinas de las cuales se nutre.” (LP) Julio 9, 1900

-“Ahora, después de que creé todo, formé la naturaleza del hombre con mis mismas manos creadoras, y conforme formaba los huesos, extendía los nervios, formaba el corazón, así concentraba mi Amor, y después que lo vestí de carne, formándolo como la más bella estatua que ningún otro artífice podía jamás hacer, lo miré, lo amé tanto, que no pudiendo contenerlo, mi Amor se derramó, y dándole mi aliento le infundí la vida; pero no estuvimos contentos, la Trinidad Sacrosanta dando en excesos de amor quiso dotarlo, dándole inteligencia, memoria y voluntad, y según su capacidad de criatura lo enriquecimos con todas las partículas de nuestro Ser Divino.” (LP) Octubre 29, 1926

6. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 3)

II EL TESORO ESCONDIDO

1. Podemos decir que **el alma verdadera**, de la que hemos hablado con diferentes palabras, es la naturaleza de Buda, o sea, la simiente de Buda.

Se puede obtener fuego poniendo entre el sol y la moxa un pedazo de lente. Pero ¿de dónde viene el fuego? Entre el sol y la lente hay mucha distancia. No existe duda de que el fuego del sol ha aparecido sobre la moxa a través de la lente. Sin embargo, aunque hubiere sol si la moxa no tuviera la naturaleza de arder no se produciría el fuego.

De la misma manera, si se concentra la Luz de la Sabiduría de Buda sobre **el alma humana, su verdadera naturaleza** que es la base para que el hombre alcance la Iluminación se encenderá y su luz iluminará las almas de los hombres y despertará la fe en Buda. Buda coge la lente y la pone ante el mundo, por ello arde por doquier la llama de la fe.

6. HERMENÉUTICA CRISTIANA

-“Hija mía, **el alma verdaderamente amante** no se contenta con amarme con ansiedad, con deseos, con fervores, sino que sólo está contenta cuando llega a hacer del amor su alimento cotidiano, entonces el amor se hace estable, serio, va perdiendo todas aquellas ligerezas de amor a las cuales está sujeta la criatura, y como ha hecho del amor su alimento, el amor se ha difundido en todos los miembros, y estando difundido en todo tiene la fuerza de sostener las llamas del amor que la consumen y le dan vida, y conteniendo el amor en sí misma, poseyéndolo, no siente más aquellos vivos deseos, aquellas ansiedades, sino que sólo siente amar más el amor que posee. Éste es el amor de los bienaventurados en el Cielo, éste es mi mismo Amor; los bienaventurados arden en amor, pero sin ansiedad, sin estrépito, con estabilidad, con seriedad admirables.” (LP) Noviembre 20, 1908

-“Todo es armonía y felicidad en el hombre; sólo la parte externa, ¿cuántas armonías y felicidades no contiene? El ojo ve, la boca habla, los pies caminan, las manos obran y toman las cosas que hay hasta donde han llegado los pies. Si el ojo pudiera ver y no tuviera la boca para expresarse, si tuviera los pies para caminar y no tuviera las manos para obrar, ¿no sería una infelicidad, una desarmonía en la naturaleza humana? Luego, las armonías y felicidad del **alma humana**, la voluntad, la inteligencia, la memoria, ¿cuántas armonías y felicidad no contienen? Basta decir que son partes de la felicidad y armonía del Eterno, Dios creaba el verdadero edén personal en el alma y en el cuerpo del hombre, edén todo celestial, y después le dio por habitación el edén terrenal; todo era armonía y felicidad en la naturaleza humana, y si bien el pecado trastornó esta armonía y felicidad, pero no destruyó del todo el bien que Dios había creado en el hombre.” (LP) Mayo 29, 1923

7. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 3)

2. Los hombres se lamentan porque no consiguen su libertad, desatendiendo la naturaleza de Buda que lleva a la Iluminación. Están poseídos por el polvo de **las pasiones** y con el alma dominada por la forma discriminativa del bien y del mal.

¿Por qué los hombres, aun teniendo esta naturaleza pura que los conduce a la Iluminación, producen una serie de imágenes falsas, ocultan la Luz de la Sabiduría de Buda y vagan errantes en este mundo de sufrimiento y de ilusión?

Una vez un hombre se levantó por la mañana, se miró al espejo, y vio que no tenía ni cabeza ni cuerpo. El pobre hombre casi enloqueció. Ni su cara ni su cuerpo habían desaparecido. Lo que ocurrió fue que se miró en el reverso del espejo, y al no verse pensó que había perdido su cuerpo y su cabeza.

Es absurdo y sin sentido sufrir porque uno no puede alcanzar la Iluminación a pesar de sus esfuerzos. No es posible fracasar en la búsqueda de la Iluminación si uno piensa que su alma discriminante es ilusoria y es el fruto de la acumulación de los deseos del pasado. Cuando cesan las falsas imaginaciones, la Iluminación aparece de por sí. Lo más curioso es que los iluminados experimentan que, sin **falsas imaginaciones**, no habría Iluminación.

7. HERMENÉUTICA CRISTIANA

-“*Tu confianza debe estar sólo en Mí, estate resignada, pues la resignación hace al alma luminosa, hace estar en su lugar a las **pasiones**, de modo que Yo, atraído por esos rayos de luz voy al alma y la uniformo toda en Mí y la hago vivir de mi misma Vida.*” (LP) vol.01

-“*Estas doncellas eran tus **pasiones**, que ahora con mi Gracia he cambiado en otras tantas virtudes que me hacen noble cortejo, estando todas a mi disposición, y Yo en recompensa las voy nutriendo con mi continua Gracia.*” (LP) Abril 1, 1900

-“*Pero para poderse reposar en Dios es necesario el silencio interior, como al cuerpo le es necesario el silencio exterior para poderse plácidamente adormecer. ¿Pero cuál es este silencio interior? Es hacer callar las propias **pasiones** teniéndolas en su lugar, es imponer silencio a los deseos, a las inclinaciones, a los afectos, en suma, a todo lo que no llama a Dios. Ahora, ¿cuál es el medio para llegar a esto? El único medio y de absoluta necesidad es deshacer el propio ser y reducirse a la nada, como era antes de que fuera creada, y cuando haya reducido a la nada su ser, retomarlo en Dios.*” (LP) Mayo 20, 1900

-“*Yo soy el único que merece ser amado; mira, si tú no quitas este pequeño mundo que te rodea, esto es, pensamientos de criaturas, **imaginaciones**, Yo no puedo entrar libremente en tu corazón, este murmullo en tu mente sirve de impedimento para dejarte oír más clara mi voz, para derramar mis gracias y para hacerte enamorar verdaderamente de Mí. Prométeme ser toda mía y Yo mismo pondré manos a la obra; tú tienes razón en que no puedes nada, no temas, Yo haré todo, dame tu voluntad y eso me basta.*” (LP) V. 01

8. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 3)

3. Esta naturaleza de Buda existe eternamente. Aunque un hombre malo nazca como un animal, sufra como un demonio en el infierno, esta naturaleza de Buda nunca se extingue. En un cuerpo impuro, hasta en el fondo de una pasión miserable está la naturaleza de Buda olvidada, ocultando su brillo.

8. HERMENÉUTICA CRISTIANA

-“ Hija mía, cómo es bello y deleitable ver a la criatura vivir en nuestro Querer; vive a nuestros reflejos, y mientras vive de nuestros reflejos absorbe en sí la semejanza de su Creador, así que se embellece, se enriquece, se engrandece tanto, de poder tomar a todos y traernos todo, y toma de Nosotros tanto amor de podernos amar por todos, y Nosotros encontramos todo en ella, todo nuestro Amor puesto fuera en la Creación, toda nuestra satisfacción, nuestro contento y la correspondencia de nuestras obras. Es tal y tanto nuestro amor hacia el alma que vive en nuestro Querer, que lo que Nosotros somos por naturaleza, el alma lo llega a ser en virtud de nuestra Voluntad; todo vertemos en ella, ni siquiera una fibra le dejamos que no esté llena de lo nuestro, la llenamos tanto, hasta hacerla desbordar fuera, formar ríos y mares divinos en torno a ella, y en estos mares Nosotros descendemos a divertirnos y vemos con amor nuestras obras sintiéndonos del todo glorificados. Por eso hija mía, vive en la Luz purísima de mi Voluntad, si quieres que tu Jesús repita de nuevo aquellas palabras que dijo al crear al hombre: En virtud de nuestra Voluntad, hagamos a esta alma a nuestra Imagen y Semejanza.” Marzo 13, 1924 (LP)

-“Hija mía, el hombre primero nace en Mí, y por eso recibe la marca de la Divinidad, y saliendo de Mí para renacer del seno materno le doy orden de caminar un pequeño tramo de camino, y al término de ese camino, haciéndome encontrar por él lo recibo de nuevo en Mí, haciéndolo vivir eternamente conmigo. Mira un poco cuán noble es el hombre, de donde viene, a donde va y cuál es su destino.” (LP) Febrero 17, 190

-“5) Con un amor ardiente de almas los busco, hijos Míos, unido a Mi amada Madre, suspirando con vivo deseo por aquellas almas que son portadoras genuinas de la Voluntad del Padre, que descubren la gran Voluntad, que sabe hacer aun de las cosas que externamente parecen malas, lo eternamente valioso.” (PC-14.2) puerta del cielo

9. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 3)

4. Una vieja historia nos cuenta que un hombre fue a casa de un amigo y allí, embriagado, se quedó dormido. El dueño de casa tuvo un asunto de urgencia y salió de viaje, pero pensando que el amigo podría caer en necesidad, le cosió una joya en el cuello de su traje. El hombre despertó, salió e ignorando la amabilidad de su amigo sufrió hambre y pobreza. Después de mucho tiempo volvió a encontrar al amigo y le pidió ayuda. A lo que el amigo contestó que hiciera uso de la joya escondida. Esta parábola nos enseña que la joya de la naturaleza de Buda permanece oculta e intacta dentro del cuello del traje de los deseos, la ira y la avaricia.

Aunque los hombres sean inconscientes de poseer esta naturaleza sublime, y aunque malos e ignorantes puedan ser, Buda nunca pierde fe en ellos porque sabe que en el más alejado de ellos existen, potencialmente, todas las virtudes de su naturaleza. Puesto que los hombres, cubiertos en su ignorancia, no ven correctamente y no saben encontrar la naturaleza de Buda que tienen dentro de sí, Buda les enseña que alejen las imaginaciones falsas y les dice que no existe diferencia entre ellos y Él.

9. HERMENÉUTICA CRISTIANA

-“ Más que sol es mi Voluntad, con tal de que el alma se exponga a sus rayos vivificantes y haga a un lado las tinieblas y la noche de su voluntad humana, su Luz surge e inviste al alma y penetra en sus más íntimas fibras para hacerle huir las sombras y los átomos del humano querer, conforme da su Luz y el alma la recibe, comunica todos los efectos que contiene, porque mi Voluntad, saliendo del Ser Supremo contiene todas las cualidades de la naturaleza divina, por lo tanto, conforme la inviste, así comunica la Bondad, el Amor, la Potencia, la Firmeza, la Misericordia, y todas las cualidades divinas, pero no en modo superficial, sino tan real, que transmuta en la naturaleza humana todas sus cualidades, de modo que el alma sentirá en sí, como suya, la naturaleza de la verdadera Bondad, de la Potencia, de la dulzura, de la Misericordia, y así de todo el resto de las cualidades supremas. Sólo mi Voluntad tiene esta Potencia de convertir en naturaleza sus virtudes para quien se da en poder de su Luz y de su calor y tiene lejano de ella la noche tenebrosa del propio querer, verdadera y perfecta noche de la pobre criatura.” Septiembre 3, 1926 (LP)

-“Ahora, el alma que entra en mi Voluntad simboliza la flor que se expone a recibir el beso y el abrazo del sol para recibir las diversas tintas que el sol contiene, y al corresponderle, recibe las diversas tintas de la Naturaleza Divina. Es propiamente el alma la flor celestial, que el Sol eterno con el aliento de su Luz ha coloreado tan bien, de perfumar Cielo y tierra y alegrar con su Belleza a la misma Divinidad y a toda la corte celestial. Los rayos de mi Querer la vacían de lo que es humano y la llenan de lo que es Divino; por eso se ve en ella el bello iris de mis atributos. Por eso hija mía, entra frecuentemente en mi Querer para recibir los matices y las variadas tintas de la semejanza de tu Creador.” Julio 30, 1923 (LP)

10. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 3)

5. Buda es aquel que ha llegado al estado de Buda; los hombres son futuros Budas; no existe ninguna diferencia cualitativa entre ellos. Sin embargo, aunque los hombres son Budas en vías de serlo, no lo son todavía; por eso, cometen un gran error si piensan que están al final del sendero de la Iluminación. Aunque tengan la naturaleza de Buda, si no practican el camino con diligencia ella no hace su aparición. Y si no aparece es que no han alcanzado la meta.

Puesto que los hombres, cubiertos en su ignorancia, no ven correctamente y no saben encontrar la naturaleza de Buda que tienen dentro de sí, Buda les enseña que alejen las imaginaciones falsas y les dice que no existe diferencia entre ellos y Él.

10. HERMENÉUTICA CRISTIANA

-“Convertir en naturaleza divina los actos humanos, son los prodigios más grandes que puede hacer mi Divina Voluntad, Ella no sabe dar sino lo que tiene, amor posee, amor da, y ¡oh! cómo se siente feliz la criatura de que no ve, que no siente más que amor, ni puede hacer menos que amar. Mi Voluntad, con dar el amor en naturaleza a la criatura, la ha puesto en el orden divino, todo es armonía entre Dios y ella, se puede decir que la ha arrojado en nuestro mismo laberinto de amor; así que si adora, agradece, bendice, su Fuerza creadora corre para cambiar en naturaleza divina la adoración, los agradecimientos, las bendiciones, así que la criatura tiene en su poder, como naturaleza suya, el siempre adorar a la Majestad Suprema, agradecerla y bendecirla, porque lo que mi Voluntad comunica en naturaleza tiene el acto continuado que jamás cesa.” Enero 30, 1938 (LP)

-“6) Cuando estén en Mis brazos, cuando se sumerjan en Mí, cuando Yo haga de ustedes la violeta, el lirio, la rosa que quiero, entonces gozaré de nueva alegría y seré Yo mismo quien les mostraré a todos. ¡Feliz quien Me posea en el Cielo! Tendrá todo, nada podrá faltarle nunca, porque poseerá la Vida. ¡Feliz el alma que sea admitida al banquete eterno!, su alimento será gustarme en el éxtasis de un gozo que sólo el Amor sabe dar. ¡Cuán feliz será quien Me vea; quien Me posea y cuánto bien Yo le daré!” (CM-108 11-May-97 Jesús)

-“7) Cada cual piense en sí mismo y escúcheme cuando internamente inclino a las consideraciones que llevan el abrazo de las cruces interiores. No se engañen. Yo no los dejo en el engaño de creer que siguiéndome basta con extasiarse Conmigo. ¡Oh, no, no basta!... También Pedro en el Tabor hablaba así pero tuvo que desengañarse, como ustedes también deben desengañarse reexaminando los movimientos internos, las reacciones del espíritu a Mi Voluntad que causan contradicción.” (CM-144 2-Jun-97 Jesús)

11. -LA ENSEÑANZA DE BUDA" DHARMA"- (Cap. 3)

6. Hubo una vez un rey que reuniendo a muchos ciegos les hizo tocar un elefante y ordenó que dijese cómo era el animal. El que tocó los colmillos dijo que era como una zanahoria gigantesca, el que tocó las orejas dijo que era como un gran abanico, el que tocó la trompa dijo que era como una mano larga de mortero, el que tocó las patas dijo que era como un mortero, el que tocó la cola dijo que era como una cuerda. Ninguno de ellos pudo captar la verdadera forma del elefante.

Con el hombre también ocurre lo mismo. Es posible conocer parte de su naturaleza, pero no es nada fácil decir exactamente cuál es su verdadera naturaleza, la naturaleza de Buda.

El único medio para encontrar esa naturaleza que no se destruye con la muerte, que permanece pura aun en medio de las pasiones impuras y que además no se extingue eternamente, es seguir a Buda y sus Enseñanzas.

11. HERMENÉUTICA CRISTIANA

- "Hija mía, es un encanto de belleza ver la naturaleza humana que vive en mi Divina Voluntad, cubierta y escondida como bajo de un prado florido, todo investido de luz fulgidísima, el alma por sí sola no habría podido formar tantas variedades de belleza, mientras que unida encuentra las pequeñas cruces, las necesidades de la vida, las variedades de las circunstancias, ahora dolorosas, ahora alegres, que como semillas se sirve de ellas para sembrarlas en la tierra de la naturaleza humana para formar su campo florido. El alma no tiene tierra y no podría producir ninguna floración; en cambio unida con el cuerpo, ¡oh! cuántas más bellas cosas puede hacer, mucho más que esta naturaleza humana fue formada por Mí, la plasmé parte por parte, dándole la más bella forma, puedo decir que hice de artífice divino y puse en ella tal maestría, que ninguno otro puede alcanzar. Así que la amé, veo todavía el toque de mis manos creadoras impreso sobre la naturaleza humana, por eso también ella es mía, me pertenece. El todo está en el acuerdo completo: Naturaleza, alma, voluntad humana, y Divina; cuando está esto, que la naturaleza se presta como tierra, la voluntad humana está en acto de recibir la Vida de la Voluntad Divina en su actos, se hace dominar en todo, no conoce otra cosa en todas sus cosas sino sólo mi Voluntad, como vida, actora, portadora, conservadora de todo, ¡oh! entonces todo es santo, todo es puro y bello, mi Fiat está sobre ella con su pincel de luz para perfeccionarla, divinizarla, espiritualizarla." Abril 13, 1932 (LP)

- "Ahora, si la naturaleza humana sin nuestra Voluntad Divina es fealdad, unida con la nuestra es de una belleza singular y encantadora; en su creación le fue puesto por Nosotros el germen de la luz, y nuestro Fiat, más que madre ternísima, se extiende con sus alas de luz sobre este germen y lo acaricia, lo alienta, lo besa, lo alimenta, lo hace crecer y le comunica con su calor y luz todas las variedades de las bellezas divinas, y la naturaleza humana recibe la participación si está bajo el influjo impetuoso y continuo de una Fuerza, de una Santidad, de un Amor todo Divino, y crece bella, amable y admirable a todos." Agosto 10, 1931 (LP)

12. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 3)

III LA NO EXISTENCIA DEL YO

1. Hemos hablado de la naturaleza de Buda, pero si pensáis que es como el “yo” o el alma de que hablan doctrinas diferentes, estáis equivocados. El concepto del “yo” se produce en las almas que sienten apego a las cosas mundanas. Esta adhesión al “yo” es algo que tiene que ser negado por los que buscan el sendero de la Iluminación. La naturaleza de Buda es una joya indescriptible que debe ser descubierta. La naturaleza de Buda es pensar que no existe algo que en realidad existe. Pensar que existe el “yo” es pensar que existe algo que en realidad no existe. Pensar que no existe la naturaleza de Buda es pensar que no existe algo que en realidad existe. Un niño pequeño se enfermó y fue auscultado por un médico. Este le dio una medicina y le dijo a la madre que después de darle no le hiciese mamar hasta que hubiera digerido del todo. La madre untó un líquido agrio en su pecho para que el niño mismo desistiera de mamar. Cuando supuso que había digerido la medicina, se lavó el pecho y le hizo comprender al niño que la razón por la que antes había tenido que negarle había desaparecido, y que ya podía mamar tranquilo puesto que el pecho ya no estaba agrio. El niño comprendiendo la verdad, mamó sin temor. Esta conducta de la madre se debe a su gran amor por el hijo. De la misma forma que la madre de la parábola, Buda predicó la no-existencia del “yo”, para alejar de los hombres el apego al “yo” y la errónea idea del mundo. Después de haber alejado esta idea equivocada, enseñó la existencia de la naturaleza de Buda.

El “yo” conduce a los hombres a la decepción, la naturaleza de Buda a la Iluminación. Buda abre los ojos de los hombres a la naturaleza de Buda que lleva cada uno dentro de sí, como aquel que viendo a una mujer sufrir de pobreza porque no sabe que tiene muchas riquezas escondidas dentro de la casa, le enseña el lugar en donde se hallan.

12. HERMENÉUTICA CRISTIANA

“- 8) Eres una mujer moderna: tienes automóvil, luz eléctrica, el avión, el ascensor, papel, lapiceros y computadoras. Muchas comodidades más. Vives entre paredes, resguardada de la humedad, tienes muchas cosas que te Ha mandado nuestro amoroso Padre. Tú no pides limosna, puedes volar de un punto a otro y te deleitas entre los regalos de la época que te encuentras. 9) El juego consiste en que sepas pasar a través de mis muchísimas cosas con espíritu desprendido. 10) Yo que tuve almas a Mi cuidado, sé que al alma le gusta llegar con las fuerzas que tiene a ciertas conclusiones muy bellas, por lo cual Me abstengo de expresarlas y espero que tu misma lo hagas cuando sea necesario. 11) Mi amada, este juego te transformará en anacoreta, porque quedarás sola, aunque estés entre mucha gente; en penitente, porque mortificarás tu juicio y, a veces tu cuerpo, para ejercitarte en la humildad; te transformará en sobria, porque tu voluntad tendrá que abstenerse de muchísimas cosas deseadas naturalmente. En una palabra, si quieres verdaderamente la santa humildad, tendrás tú más ocasiones de ejercitarte en ella, de las que yo tuve en Mis tiempos.” (La gran cruzada de la Misericordia. CM. 123. 20 de mayo de 1997. Bernardo, Abad de Claraval).

13. -LA ENSEÑANZA DE BUDA" DHARMA"- (Cap. 3)

2. Si todos los hombres llevan como algo innato **la naturaleza de Buda**, por qué existe la diferencia de nobles y plebeyos, ricos y pobres, y ocurren cosas tan desgraciadas como la de matar o ser muerto, engañar o ser engañado?

Un luchador de la corte acostumbraba llevar una piedra preciosa de adorno sobre su frente entre las cejas. Un día cuando luchaba, se le incrustó la piedra dentro de la piel. El luchador pensó que había perdido la joya y tan sólo fue al médico para que le curara la herida. El médico, al verlo, enseguida se percató de que la piedra había producido la herida. Cogió un espejo y le mostró la joya incrustada debajo de la costra. También la naturaleza de Buda está escondida entre el polvo y la suciedad de los deseos de los hombres, pero con la Sabiduría se llega a descubrirla de nuevo.

De esta forma la naturaleza de Buda, aunque existente en los hombres, se encuentra cubierta de codicia, ira y necesidad, sujeta a los actos y a su retribución. Sin embargo, no es que esté destrozada; al eliminarse las necesidades y la duda, aparecerá de nuevo. Como el luchador de la parábola que vio la joya en el claro espejo del médico, los hombres verán la naturaleza de Buda escondida en la piel de la pasión y de los deseos mundanos, con la Luz de Buda.

13. HERMENÉUTICA CRISTIANA

-"Por tanto, debe el alma mirar la carne como si fuera un jumento, darle moderadamente lo necesario para la vida, estimularla al trabajo, corregirla con temor y abstinencia, y observar sus impulsos, no sea que por condescender con la flaqueza de la carne, peque el alma contra Dios. Lo segundo, el alma debe ser celestial, porque tiene la imagen del Señor de los cielos, y por tanto, nunca ha de entretenerse ni deleitarse en cosas carnales, a fin de no hacerse imagen del mismo demonio. Lo tercero, ha de ser fervorosa en amar a Dios, porque es hermana de los ángeles, inmortal y eterna. Debe, por último, ser hermosa en todo linaje de virtudes, porque eternamente ha de ver la hermosura del mismo Dios: mas si consiente con los deseos de la carne, será horrorosa por toda la eternidad. Conviene también, que la señora, que es el alma, tenga su comida, la cual es la memoria de los beneficios de Dios, la consideración de sus terribles juicios y la complacencia en su amor y en guardar sus mandamientos. Debe, pues, el alma evitar con empeño el no ser jamás gobernada por la carne, porque entonces todo se desordena, y sucede que los ojos quieren ver cosas deleitables y peligrosas, los oídos quieren oír vaciedades; agrada también gustar cosas suaves y trabajar inútilmente por causa del mundo; entonces es seducida la razón, domina la impaciencia, disminúyese la devoción, auméntase la tibieza, pálíase la culpa, y no son consideradas las cosas futuras; entonces mira el alma con desprecio el manjar espiritual, y le parece penoso todo lo que es del servicio de Dios". Capítulo 50 (LRC)

14. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 3)

3. Todos los hombres poseen dentro de sí la naturaleza de Buda aunque existan diferencias en el ambiente, el modo de vida, los actos y la retribución a su conducta, así como vacas de diferentes colores dan por igual una leche blanca.

En el Himalaya existía una hierba medicinal maravillosa. Su sabor era de suave dulzura pero por crecer en grandes espesuras era imposible encontrarla. Un día un sabio pudo descubrirla guiado por su perfume. Reunió las hierbas en un recipiente con agua para poderlas conservar, pero después de su muerte, la hierba medicinal permaneció oculta en la montaña. El agua del recipiente se descompuso y empezó a hacerse agria, peligrosa y de sabor diferente.

La naturaleza de Buda está oculta como la hierba de la parábola en la profunda maleza de los deseos. Es muy difícil encontrarla. Ahora Buda abre la maleza para mostrar su interior a los hombres. La naturaleza de Buda es de un único sabor dulce, pero debido a los deseos mundanos de los hombres sabe de diferentes gustos y por ello los hombres reciben diversas clases de vidas.

14. HERMENÉUTICA CRISTIANA

-“De la misma manera Dios visita a todos con su gracia; pero a los que ve que dicen: Queremos dejar de pecar, y en cuanto nos sea posible, deseamos aspirar a la perfección, a estos los visita con mayor frecuencia el Espíritu Santo, para que puedan vencer los escollos. Y a los que entregan toda su voluntad en manos de Dios, no queriendo hacer nada contra el amor de Dios, y procuran imitar a los más perfectos, siguen los consejos de las personas humildes y luchan con discreción contra los malos deseos de su carne, a estos se los acerca a sí Dios como la gallina a sus polluelos, haciéndoles su yugo suave y consolándolos en sus trabajos.” Capítulo 14 (LRC)

-“El que quiere juntarse a mí, dice Jesucristo a santa Brígida, debe entregarme toda su voluntad y arrepentirse de sus pecados, y entonces mi Padre lo atrae a la perfección, porque es atraído por mi Padre, todo el que trueca la mala voluntad en buena y desea enmendarse. Y atráelo mi Padre, poniendo él en ejecución los buenos deseos, porque cuando el deseo no es bueno, no tiene mi Padre de dónde asirlo para atraerlo.” Capítulo 85. (LRC)

-“Y Jesús: “No puedo cambiar, no es de la naturaleza divina el mutarse; la naturaleza humana se cambia, la Divina jamás, por tanto está segura que en Mí nada ha cambiado, ¿pero sabes qué quiero darte por paga? Mi misma Vida. Cada verdad que te manifiesto son dones de Vida Divina que te hago, y te doy la libertad que no sólo la tengas para ti este gran don, sino que la puedes multiplicar para darla a quien tú quieras y a quien la quisiera recibir.” Septiembre 5, 1928 (LP)

15. -LA ENSEÑANZA DE BUDA" DHARMA"- (Cap. 3)

4. Esta **naturaleza de Buda** es tan dura como el diamante y no hay nada que la pueda destrozar. Se pueden abrir agujeros en la arena y en las piedras, pero es imposible agujerear un diamante.

El alma y el cuerpo del hombre pueden ser destruidos, pero nada puede destrozar la naturaleza de Buda.

Esta naturaleza es la característica más preciosa del hombre. En el mundo existe la idea de la superioridad del hombre sobre la mujer, pero en la Enseñanza de Buda no existe tal diferencia; sólo es superior a todo la Sabiduría que conoce la existencia de la naturaleza de Buda.

Se funde el oro bruto y, refinándolo, se obtiene el oro fino. Al fundir el oro del alma y al suprimir los desperdicios de los deseos mundanos, todos los hombres pueden descubrir su propia naturaleza de Buda.

- FIN DEL CAPÍTULO TERCERO -

15. HERMENÉUTICA CRISTIANA

-“369 El hombre y la mujer son creados, es decir, son queridos por Dios: por una parte, en **una perfecta igualdad** en tanto que personas humanas, y por otra, en su ser respectivo de hombre y de mujer. "Ser hombre", "ser mujer" es una realidad buena y querida por Dios: el hombre y la mujer tienen una dignidad que nunca se pierde, que viene inmediatamente de Dios su creador (Cf. Gn 2,7.22). El hombre y la mujer son, con la misma dignidad, "imagen de Dios". En su "ser-hombre" y su "ser-mujer" reflejan la sabiduría y la bondad del Creador.

370 Dios no es, en modo alguno, a imagen del hombre. No es ni hombre ni mujer. Dios es espíritu puro, **en el cual no hay lugar para la diferencia de sexos**. Pero las "perfecciones" del hombre y de la mujer reflejan algo de la infinita perfección de Dios: las de una madre (Cf. Is 49,14-15; 66,13; Sal 131,2-3) y las de un padre y esposo (Cf. Os 11,1-4; Jr 3,4-19). (CI)

-“366 La Iglesia enseña que cada alma espiritual es directamente creada por Dios (Cf. Pío XII, Enc. *Humani generis*, 1950: DS 3896; Pablo VI, SPF 8) -no es "producida" por los padres -, y que **es inmortal** (Cf. Cc. de Letrán V, año 1513: DS 1440): **no perece** cuando se separa del cuerpo en la muerte, y **se unirá de nuevo al cuerpo en la resurrección final**.

367 A veces se acostumbra a distinguir entre alma y espíritu. Así S. Pablo ruega para que nuestro "ser entero, el espíritu, el alma y el cuerpo" sea conservado sin mancha hasta la venida del Señor (1 Ts 5,23). La Iglesia enseña que esta distinción no introduce una dualidad en el alma (Cc. de Constantinopla IV, año 870: DS 657). "Espíritu" significa que el hombre está ordenado desde su creación a su fin sobrenatural (Cc. Vaticano I: DS 3005; Cf. GS 22,5), y que su alma es capaz de ser elevada gratuitamente a la comunión con Dios (Cf. Pío XII, *Humani generis*, año 1950: DS 3891)". (CI)

CONCLUSIONES AL TERCER CAPÍTULO

Del vacío pleno (*sunyata*) a la iluminación (*satori*)

En este tercer capítulo se hace referencia a la iluminación para lo cual se hace necesario adquirir un alma pura, sin discriminación relacionado con el capítulo segundo “La figura real del alma humana” en el que se explica su estructura y el proceso evolutivo de la humanidad. Se afirmaba en el capítulo segundo que “para el que quiere alcanzar la Iluminación, hay dos extremos que tienen que ser evitados para llegar al Camino Medio (nota 20 y 24). Es por ello que al percibir la no-existencia de las diferencias es importantísimo el estado de igualdad de las cosas, lo que denomina “Sunyata” (el vacío que lo llena todo).

En la experiencia de “iluminación” budista referida a la naturaleza original del ser se constata (análogamente a la mística cristiana) el vacío del propio alma cuando se libera de todas las pasiones y deseos impuros. Vacío necesario para participar del estado de gracia y que todos potencialmente pueden experimentar. Pero el vacío del yo humano no es el vacío de la semilla divina por lo que tiene que admitir un constructo aparentemente contradictorio: “el vacío pleno” (*sunyata*).

En el budismo se refiere al “vacío pleno” como un atisbo de la unidad de todas las cosas, este vacío absoluto (*sunyata*) es donde todas las cosas son posibles, por lo tanto no es algo negativo. No obstante como vacío pleno podría evocar análogicamente el vacío de la semilla divina. Hay un vacío en la divina voluntad que debe ser llenado con la participación de la voluntad humana.

En el cristianismo a medida que se adquiere lo divino se destruye el

propio ser tanto que puede decirse que ya no le queda nada de lo suyo y sirve de espacio al Espíritu Santo. La criatura para entrar en la unión con la luz divina debe vaciarse de todo reduciéndose a la nada. La iluminación cristiana sería el encontrar y experimentar en la pequeñez de la criatura la capacidad y espacio del Todo. El Todo divino en la nada humana sería la maravilla de las maravillas.

Según el cristianismo no fue la naturaleza humana la que pecó sino la voluntad humana por lo que la naturaleza humana estaba tal cual aunque habitara la voluntad rebelde y que al participar en la desobediencia quedó contaminada. Existe una posibilidad de retornar a ese estado de belleza tal y como fue creada y en este sentido puede entenderse el anhelo de la experiencia iluminadora de la naturaleza original budista. Es obvio que la naturaleza humana original tal y como fue creada tiene que ser forzosamente bella al estar iluminada por la Luz divina.

Desde el budismo se nos dice que el ser humano no puede convertirse en Dios por más que lo intente admitiendo por lo tanto que ontológicamente Dios y el hombre son totalmente diferentes. Asimismo desde el cristianismo se admite que la persona no es Dios sino que *participa* de la naturaleza divina. La obediencia a las enseñanzas de Jesucristo tiene la virtud de divinizar la naturaleza humana haciéndole adquirir las propiedades divinas.

En este sentido puede afirmarse que el alma de Gautama como la de cualquier persona fue *creada* y por tanto inmortal mientras que la de Jesús fue *engendrada* y por tanto de la misma naturaleza divina. En cuanto criaturas podemos decir que “somos inmortales” porque aunque hemos sido creadas en la Mente Suprema que es eterna nuestra existencia es participativa no es autocreativa. **No obstante esto en cuanto al alma de**

María Jesús se refiere a ella como eterna:

Poco antes os he dicho: "la eterna belleza del alma de mi Madre". Soy la Palabra y por ello sé hacer uso de la palabra sin error. He dicho: eterna, no inmortal. Y no lo he dicho sin una finalidad. Inmortal es quien, habiendo nacido, ya no muere. Así, el alma de los justos es inmortal en el Cielo, el alma de los pecadores es inmortal en el Infierno; porque el alma, una vez creada, ya no muere sino a la gracia. Pero el alma tiene vida, existe desde el momento en que Dios la piensa. La crea el Pensamiento de Dios. El alma de mi Madre desde siempre es pensada por Dios. Por tanto es eterna en su belleza, en la cual Dios ha vertido todas las perfecciones para recibir de ella delicia y confortación." (MV. 348)

Por otra parte el budismo proclama "**la no existencia del yo**" aunque tácitamente lo afirma ya que negar algo supone afirmar que existe. El "yo" conduce a los hombres a la decepción, la naturaleza de Buda a la Iluminación. La naturaleza de Buda está oculta en la profunda maleza de los **deseos**. Frente a esta negación del yo en el budismo Jesús afirma el suyo ("Cuando les dijo: "**Yo soy**", retrocedieron y cayeron en tierra." Juan 18:6; "Ellos no son del mundo, como **yo no soy** del mundo." Juan 17:16).

Una posible interpretación analógica de la *no existencia del yo* proclamada por el budismo sería como anhelo de liberarse del "viejo yo" que en el cristianismo incluso también tiende a ser negado: "Entonces dijo Jesús a sus discípulos: «Si alguno quiere venir en pos de mí, **niéguese a sí mismo**, tome su cruz y sígame" (Mateo 16:24). El "yo" budista se refiere a un sentimiento de apego a lo "mío" una dualidad que impide realizar la verdad de la naturaleza original y es causa de sufrimientos.

El hecho de que se diferencia entre un yo y un yo verdadero demuestra que desde el punto de vista budista se toma conciencia de la lucha interna entre un yo espiritual y otro carnal (*“Así como no se puede decir que desaparece la posada cuando se va el viajero, no es posible decir que desaparece el yo verdadero..”*. *La naturaleza de Buda. El alma pura*, 4).

En el cristianismo no se niega el yo, sino que reconoce en el ser humano dos yoes (el natural y el espiritual) siempre imperfectos que se unifican para asumir el yo perfecto de Jesús a través de una “*metanoia*” (arrepentimiento) que hace posible un renacer. (*)

Frente al concepto de “iluminación” budista (estado de Buda, *satori*) está el concepto de “iluminación” cristiana (estado de *Gracia*). También en las Enseñanzas de Jesucristo todos tienen la naturaleza que lleva al estado de Gracia aunque los seres humanos puedan desconocer que en su alma exista esta pureza original. La enseñanza budista también intuye la naturaleza cambiante de la naturaleza humana.

Para obtener como don y al mismo tiempo por voluntad la iluminación en el cristianismo, esto es, lo que se suele llamar “gracia tumbativa” lo más importante es la disposición del alma. Se suele comparar al alma con un terreno anímico y en todo terreno es sabido que antes de plantar semillas hay que llenar el campo de sustratos, humedeciendo la tierra para poder introducir las semillas y hacer drenajes que evite que las raíces se asfixien

(*) Puede consultarse sobre la transformación del yo empírico y su trascendencia temporal el interesante trabajo de Daniel Millet-Gil: “Los *jhanas* budistas y la oración mística y sus grados”. (<https://www.researchgate.net/publication/326733706>)

por exceso de tierra.

En el terreno sembrado por la Palabra del Verbo la tierra del alma debe tener la actitud de cosechar haciendo suya la semilla del Querer Divino, esto es, las obras, las palabras, los pensamientos de la vida de Jesús. Semilla que lleva en sí la Potencia creadora que fecundará a otras almas.

Para realizar tal injerto se necesita vaciar el yo humano (la voluntad humana) para poder trasplantar la semilla divina. Este deseo del bien (vaciar el yo) ya es algo que Dios ha puesto en el alma puesto que toda inteligencia mental puede dejar entrar tanto semillas buenas o malas según su libre albedrío. No obstante el vacío, la nada que experimenta el alma para poder recibir la semilla divina no puede llamarse propiamente “vacío” pues hay todavía detritos impuros siendo necesario el “vacío divino” aportado por la semilla del Verbo. Incluso puede existir vacíos llenos de humo en los corazones de los soberbios, ídolos de sí mismo, egocéntricos o los llamados narcisistas espirituales sujetos a un excesivo intuicionismo- racionalista. (a)

Así pues, en el cristianismo el Agricultor Celestial siembra su palabra según la Potencia e Inmensidad del Espíritu Santo para injertar semillas con el germen de vida de la gracia siempre y cuando el alma se abandone con humildad a poder ser cosechada. Hay que tener siempre presente que el alma es un ente espiritual con capacidad de renacer por propia y libre

(a) No es de extrañar que en las reglas del monacato budista en el primer grupo sobre las ofensas voluntarias que lleva consigo, *ipso facto*, la expulsión de la Orden está la cuarta:

“4.Ningún monje se gloriará jactanciosamente de vivir un estado de superhombre.” (Jesús López-Gay, S.J. “La mística del budismo. Los monjes no cristianos del Oriente.” Madrid, Biblioteca de Autores Cristianos, 1974, pág.162.)

-Sobre el tema del **narcisismo espiritual** como una epidemia del espíritu puede consultarse el interesante trabajo de Marco Antonio de la Rosa Ruiz Esparza, M.G. “Narcisismo espiritual ¿se puede superar?” (*impr. digital*)

voluntad y por paradójico que parezca según textos de revelaciones privadas el verdadero vacío espiritual viene aportado por la semilla divina, no por el vacío del yo. Posible analogía pero con connotaciones diferentes con el “vacío pleno” (*sunyata*) budista.

Esta tendencia a ponerse uno mismo en el centro de todo acontecimiento evoca la actitud de Adán y Eva en el Génesis ya que cuando cesaron de amar a su Dios, cesó el verdadero amor a sí mismos.

“...y en cuanto cesó de amar a su Dios, cesó el verdadero amor a sí mismo, sus miembros y sus potencias se rebelaron a él mismo, perdió el dominio, el orden y se volvió temeroso, no sólo esto, sino cesó el verdadero amor hacia las demás criaturas..” LP. Septiembre 6, 1923.

El vacío del alma es un tema recurrente en la mística cristiana:

*“Ahora hija mía, ¿ves este gran vacío en el que tantas cosas creé? Pues el vacío del alma es más grande aún. Aquél debía servir para habitación del hombre, **el vacío del alma debía servir para habitación de un Dios.**” (LP. Julio 19, 1923)*

El Agricultor Celestial siembra su Palabra para lo cual hace zanjas y surcos por lo que la tierra del alma debe ser preparada para que sea fértil y no de tipo calizo o arenoso con la humildad y la práctica del bien. La Semilla al injertarse y al unirse con la voluntad humana hace que ésta deje de existir. La semilla de la Divina Voluntad es el germen de resurrección a la gracia, esto es, un renacer del alma que por una iluminación de la conciencia acepta abandonándose y conformándose a este nuevo injerto (yo nuevo).

Asimismo la semilla que contiene el germen de la Voluntad Divina posee

un vacío (vacío de la semilla) de tal manera que puede hablarse de dos vacíos necesarios para que el germen pueda desarrollarse. (b)

Siguiendo los mensajes de Luisa nos encontramos con el enigmático **vacío divino**:

*“Ya la semilla la tienes, **con tener la semilla tienes el vacío donde poder recibir estos mares inmensos de felicidad, de alegría y de belleza; quien no tiene la semilla, quien no ha conocido una verdad en la tierra, le falta el vacío para poder recibir estas bienaventuranzas.**” (LP Enero 25, 1922)*

Este enigmático “vacío de la semilla” relacionado con las verdades tal vez podamos entenderlo conectándolo con la idea de la necesidad de llenar los vacíos del obrar humano que existen en el trono celestial:

(b) *“Hija mía, ahora conviene que me ponga de nuevo al trabajo, para trabajar el **terreno de tu alma y poder sembrar la semilla de mi palabra** para alimentarte. Yo hago como el campesino cuando quiere sembrar su terreno, forma las zanjías, hace los surcos y después arroja la semilla en ellos, luego regresa a cubrir de tierra las zanjías y los surcos donde ha puesto la semilla, para tenerla defendida y darle tiempo para hacerla germinar, para recogerla centuplicada y hacer de ella su alimento; pero debe estar atento a no ponerle mucha tierra, de otra manera sofocaría su semilla y la haría morir bajo tierra y él correría peligro de quedarse en ayunas. Así hago Yo, preparo las zanjías, formo los surcos, ensancho la capacidad de su inteligencia para poder sembrar mi palabra divina y así poder formar el alimento para Mí y para ella, después cubro las zanjías y los surcos de tierra, y esta tierra es **la humildad, la nada**, el aniquilamiento del alma, alguna pequeña debilidad o miseria suya, esto es tierra y es necesario que la tome de ella, porque a Mí me falta esta tierra y así cubro todo y espero con alegría mi cosecha. Ahora, ¿quieres saber qué pasa cuando sobre mi semilla se pone mucha tierra? Cuando el alma siente sus miserias, sus debilidades, **su nada**, y se aflige, piensa tanto en esto que pierde el tiempo y el enemigo se sirve de ello para arrojarla en la turbación, en la desconfianza y en el abatimiento; todo esto es tierra de más sobre mi semilla. ¡Oh, cómo **mi semilla** se siente morir, cómo se le dificulta germinar bajo esta tierra! Muchas veces estas almas cansan **al Agricultor Celestial** y él se retira. ¡Oh! cuántas de estas almas hay.” (LP. Marzo 3, 1922 El Agricultor Celestial siembra su palabra.)*

“Hija mía, en torno a mi trono hay un vacío, y este vacío debe ser llenado por la gloria que me debe la Creación; por eso, quien me ve despreciado por las otras criaturas y me honra, no sólo por sí, sino por los demás, me hace renacer los honores en este vacío” LP Diciembre 22, 1903.

Un vacío de actos humanos localizado en la Voluntad divina:

*“Hija mía, **en mi Voluntad está el vacío del obrar humano en el divino**, y este vacío debe ser llenado por quien vive en mi Querer, por cuanto más estés atenta a vivir en mi Querer y en hacerlo conocer a los demás, tanto más pronto será llenado este vacío, de modo que mi Querer, viéndose mover en Sí al querer humano, como regresando al principio de donde salió, se sentirá satisfecho y verá cumplidos sus anhelos sobre la generación humana, aunque fueran pocos o aun uno solo, porque mi Querer con su Potencia puede rehacerse de todo, aun con uno solo si no encuentra otros, pero es siempre una voluntad humana que debe venir en la mía a llenar todo lo que los demás no hacen; esto me será tan agradable que rasgaré los Cielos para hacer descender mi Querer y hacer conocer el bien y los prodigios que contiene.” LP (Abril 2, 1923)*

Vacíos que necesitan ser llenados con el bien:

“Sucede como con un fruto espinoso y de cáscara dura, pero que dentro contiene una sustancia dulce y útil, si la persona es constante en quitar las espinas, al exprimir aquel fruto extraerá toda la sustancia del fruto y gustará

*lo exquisito de ese fruto, así que el pobre fruto **ha quedado vacío de lo exquisito** que contenía y las espinas y la cáscara han sido tiradas. Así el alma, en la frialdad, en la aridez, arroja a tierra las satisfacciones naturales, se vacía de sí misma y con la constancia se exprime a sí misma y el alma queda con **el fruto puro del bien**, y Yo disfruto lo dulce de éste.”*

Y sobre la manera de hacer estos vacíos:

*“Pero, ¿cómo se forman estos vacíos? **La humildad es la pala que excava y forma el vacío**; el desapego de todo, aun de sí mismo, es el vacío mismo; la ventana para hacer entrar la luz de la Gracia en este vacío es la confianza en Dios y la desconfianza de sí mismo; así que por cuanto confía en Dios, otro tanto ensancha la puerta para hacer entrar la luz y tomar de ella mayor Gracia; la custodia que guarda la luz y la engrandece es la paz.” (LP Mayo 16, 1909)*

Si hablamos de iluminación cristiana lo más importante no sólo es el vacío del yo para recibir el germen de la gracia sino que todo el proceso culmina en los frutos cosechados al igual que el árbol bien cultivado se conoce por sus frutos (1 Jn 25). Santiago nos dice que la fe sin obras no sirve: **¿Qué le aprovecha, hermanos míos, a uno decir: Yo tengo fe, si no tiene obras? ¿Podrá salvarle la fe?** “Epístola de Santiago” (2, 14)

Un atisbo de esta idea también la encontramos en el budismo cuando en sus enseñanzas instruye a sus discípulos:

“No ocupéis la mente con necedades y no malgastéis el tiempo en cosas vanas. Recoged la flor de la Iluminación y segad los frutos del recto camino.” (Bukkyo Dendo Kyokai: “La última enseñanza de Buda”. 3)

“Después que se siembra la semilla con paciente cuidado, los sudores del

*agricultor y los cambios de las estaciones hacen brotar de la tierra la planta, y al final madura el **fruto**. De la misma forma a medida que se practican las tres ciencias de la ley de conducta, la concentración del alma y la sabiduría, van desapareciendo las pasiones terrenales y el hombre se libra de los apegos llegando por fin a alcanzar la Iluminación.” (DH. Dharma. La enseñanza de Buda. Capítulo segundo. LAS PRACTICAS DEL CAMINO (1). Bukkyo Dendo Kyokai, 2006.)*

En el budismo existe una estrecha relación entre el “vacío pleno” (*sunyata*) y la “iluminación budista” (*satori*, *nirvana*). Hay autores que incluso mantienen que el vacío pleno se identifica con el estado de iluminación. (c)

(c) “Buda enseñó que que “*Sunnata*” es “*Nibban*” a y que “*Nibbana*” es “*Sunnata*”. *Sunnata* es una mente que es o está vacía de deseo y apego al “yo” y “lo mío”. Cuando no hay deseo o apego, la mente está vacía. Así que un día, una persona laica común u ordinaria puede tener muchos momentos libres de deseo y apego al “yo” y a “lo mío”. Eso igualmente significa que la persona laica puede del mismo modo estar en “*Sunnata*” por muchos momentos diarios, durante los cuales está también en “*Nibbana*”. Pero estos momentos pasan tan rápidamente que la mente no los reconoce.” (“*Sunnata*” -Tocando el Vacío. Traducido por Yin Zhi Shaky. www.acharia.org.)

-Para un análisis más detallado puede consultarse “*The Buddha & Jesus. An anthology of Articles by Jesuits engaged in Buddhist Studies and Inter-religious Dialogue*”. Edited by Cyril Veliath, SJ. Faculty of Global Studies. Sophia University, Tokyo, Japan

BIBLIOGRAFÍA CITADA (*)

BJ. *La Santa Biblia de Jerusalén, 1976.*

CA. *La Gran Cruzada del Amor.*

<file:///C:/Users/villa/Desktop/valtorta/rivas/cruzada%20amor%20.pdf>

CI: *Catecismo de la Iglesia Católica.*

file:///C:/Users/villa/Desktop/catecismo_iglesia_catolica.pdf

DH. *Dharma. La enseñanza de Buda. Capítulo tercero. La causalidad. Bukkyo Dendo Kyokai, 2006.*

<file:///C:/Users/villa/Desktop/BUDISMO/4%20nobles%20verdades.pdf>

DHH. *Dios habla hoy. Sociedad Bíblica Americana. III Conferencia General del Episcopado Latinoamericano. Puebla- México. 1979.*

LP: *Luisa Piccarreta. Libro de Cielo.*

<file:///C:/Users/villa/Desktop/DIVINA%20VOLUNTADLIBRO%20DE%20CIELO.Obispos.pdf>

LRC: *El Libro de las Revelaciones Celestiales. Santa Brígida.*

<file:///C:/Users/villa/Desktop/valtorta/Santa%20Brigida%20de%20Suecia,Revelaciones%20celestiales.pdf>

LPC. *La Palabra continúa en el signo de los tiempos.*

file:///C:/Users/villa/Desktop/palabra_continua%20_1_.pdf

MCD. *Mística Ciudad de Dios. María de Jesús de Ágreda.*

<file:///C:/Users/villa/Desktop/valtorta/agreda%20F/MCD-IND.pdf>

MVL. *Valtorta, Maria. Lecciones sobre la Epístola de San Pablo. Italia, Traductor: Santiago Simón Orta. (Libro electrónico.)*

MV. Valtorta, Maria El Evangelio como me ha sido revelado. (Libro electrónico)

file:///C:/Users/villa/Desktop/valtorta/primer_vida_publica.pdf

BIBLIA EN JAPONÉS: *file:///C:/Users/villa/Desktop/biblias/新改訳聖書 %20-%20*

(*) *El autor agradece a todos los que directa o indirectamente han contribuido a la realización de este ensayo. En cuanto a las ideas expuestas expreso mi adhesión a la doctrina del magisterio de la Iglesia Católica en cuestiones relativas a la fe cristiana. Negritas y subrayados del autor.*

Desde una hermenéutica cristiana se admite que Dios en su justicia, premiará o castigará según la fe de cada espíritu: *“Porque Dios ponderará cuánto mayor esfuerzo habrán tenido que realizar para ser justos los separados del Cuerpo místico, los mahometanos, brahmánicos, budistas, paganos, esos en los que no se hallan la Gracia ni la Vida y con ellas mis dones y las virtudes que de dichos dones se derivan. Para Dios no hay acepción de personas, El juzgará por los actos realizados, no por el origen humano de los hombres. (...)”* -María Valtorta. “Lecciones sobre la Epístola de San Pablo a los romanos”. (Capítulo II, versículos 9-11).

Objetivo del entrenamiento

修行の決意

〈願 文〉より

比叡山で修行をするための誓い

この世界を安らかにし
人々を救うため
永遠に修行を
していきたい

A

私はおろかな人間である
心が清浄になり
真理を悟るまでは
山を降りない

B

人間として生まれることは
大変なものである
時間を惜しんで
できるだけ善いことを
しなければいけない

C

OBJETIVO DEL ENTRENAMIENTO. JURAMENTO PARA LOS EJERCICIOS EN HIEIAN:

- (A) PARA PACIFICAR A ESTE MUNDO QUIERO ENTRENAR ETERNAMENTE.

- (B) SOY UN NECIO Y NO SALDRÉ DE LA MONTAÑA HASTA QUE MI CORAZÓN SE PURIFIQUE Y SE DE CUENTA DE LA VERDAD (satoru: iluminar).

- (C) NACER COMO HUMANO ES UN GRAN PROBLEMA. VALORANDO EL TIEMPO HAY QUE HACER EL BIEN LO MÁS POSIBLE. (traducción libre)

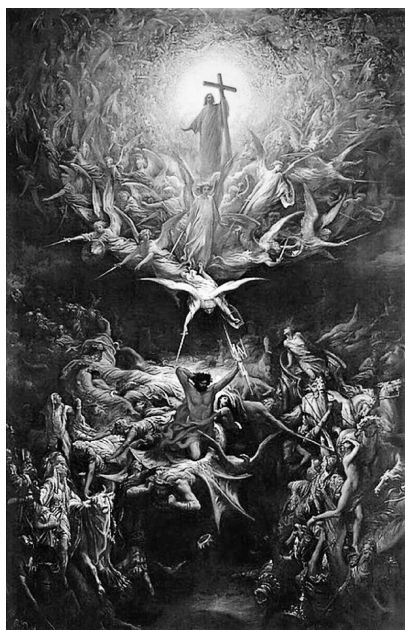


伝教大師最澄
日本天台宗開祖 766~822年

Monje budista Saicho (conocido como Dengyo Daishi).

El monte Hiei fue elegido (788) como lugar del Templo Enryaku-ji en tiempos del emperador Kanmu (737-806) entre la prefectura de Kyoto y la de Shiga.

Enryaku-ji es un centro en la montaña para la práctica espiritual. (*Shugyo- no Yama*)



“El triunfo del Cristianismo sobre el paganismo” Gustave Doré (1899)

PAGANISMO:

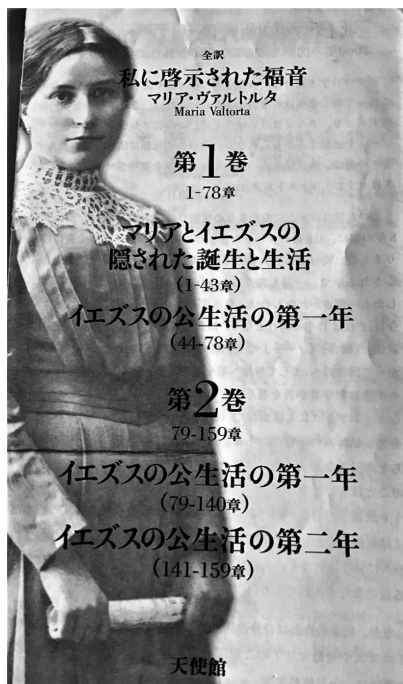
(Del lat. tardío *paganismus*). 1. m. Religión de los gentiles o paganos. 2. m. Conjunto de los gentiles.

PAGANO

(Del lat. *paganus*, aldeano, de *pagus*, aldea, pago, que en lat. eclesiástico adquirió el significado de gentil por la resistencia del medio rural a la cristianización).

Adj. Se dice de los idólatras y politeístas, especialmente de los antiguos griegos y romanos. U. t. c. s. 2. adj. Se dice de todo infiel no bautizado.

(Del Diccionario de la R.A.E. 21 ed.)



Versión japonesa del “Evangelio como me ha sido revelado”. Hay un título precedente: “El Hombre Dios” como traducción simplificada.

“¡Oh! ¡No puedo jactarme del bien que he brindado! Lo ha hecho Jesús: yo he puesto por mi parte sólo la absoluta sumisión a todos sus intentos. Jesús me decía: “Obra de este modo”, y yo lo hacía de ese modo. “Di esto” y yo lo decía. “Ejecuta tal cosa” y yo la ejecutaba. ¡Oh! ¡Si las almas entendieran cuán útil es abandonarse a la intención divina!”

(Maria Valtorta. “Autobiografía” Centro editorial Valtortiano, Italy, 1997, pág. 254).